令和７年度（第９期）
モンゴル国・ドルノゴビ県高校生相互交流事業
参加者レポート

令和７年８月４日（月）～８月９日（土）

静岡県教育委員会　教育政策課

静岡県高校生訪問団　行程案

（省=モンゴル国教育･科学省、DG 県=ドルノゴビ県）

	日付	行程	宿泊先・就寝時間
1	8/4 (月)	16:30　集合（富士山静岡空港） 16:45　出発式（静岡県関係者にて） 19:15　富士山静岡空港発（フンヌ・エア MR-660） 22:55　チンギス・ハーン国際空港着 24:00　チンギス・ハーン国際空港発（省手配：バス＋荷物車） 25:00　東横インウランバートル着（省手配：夜食）	（省手配） 東横インウランバートル （就寝 26:00）
2	8/5 (火)	07:30　朝食（省手配：東横インウランバートル１階レストラン） 09:00　東横インウランバートル発（DG 県手配バス・通訳２名同行） 13:30　昼食（DG 県手配：チョイル道の駅レストラン） 17:00　**出迎え（サインシャンド郡白門）** 18:00　ドルノゴビホテル着 19:00　夕食（DG 県手配：学校施設食堂） 20:00　**遊園地での交流**	（DG 県手配） ドルノゴビホテル （就寝 22:00）
3	8/6 (水)	07:00　朝食起床、荷物準備のうえホテル出発（バスにて移動） 08:00　朝食（DG 県手配：学校施設食堂） 09:00　**ドルノゴビ県歴史博物館見学** 10:30　**副知事表敬訪問** 11:00　**第６小中高一貫学校交流（ふじのくに高校生文庫 寄贈）** 13:00　昼食（DG 県手配：第６学校食堂） 14:00　**バレー親善試合（スポーツ宮殿）** 16:30　ジャルガランキャンプ着 **（遊牧民文化体験）** 18:00　夕食（DG 県手配：ジャルガランキャンプ） 20:00　**交流（両国文化披露、民族舞踏）**	（DG 県手配） ジャルガランキャンプ （就寝 24:00）
4	8/7 (木)	07:00　起床、出発準備（DG 県手配：ジャルガランキャンプ） 08:00　朝食 09:00　**遊牧民宅訪問体験（乗ラクダ、乗馬）** **ハマリーンヒーデ寺院見学、パワースポット体験** 13:00　昼食（DG 県手配） 14:00　ホテル到着（**静岡道路の見学**） 17:00　**知事主催歓迎夕食会**（DG 県手配：サインシャンド群市街地レストラン） 18:00　**戦車丘見学** 19:00　サインシャンド駅着、寝台列車乗車　→19:40 駅出発	（DB 県手配） 寝台列車 個室４人１部屋 19:40 発 サインシャンド駅 ↓ 07:05 着 ウランバートル駅
5	8/8 (金)	07:05　ウランバートル駅着→バス移動（省手配：バス＋荷物車） 07:30　東横インウランバートル着（省手配：朝食） 10:00　**市内視察（ザイサン丘、ノミンデパート）** 13:00　昼食（省手配：モダンノマドレストラン） 14:30　**在モンゴル日本大使館訪問** 15:30　**市内視察（スフバートル広場、国立チンギスハーン博物館）** 18:30　夕食（省手配：アルタンガダスレストラン） 20:00　ホテル着、解団式、終了後自由時間	（省手配） 東横インウランバートル ※8/8 ウランバートル駅到着後のアーリーチェックイン含む （就寝 22:00）
6	8/9 (土)	07:00　起床、朝食（省手配：東横インウランバートル） 08:30　荷物準備 10:00　東横インウランバートル発（省手配：バス＋荷物車） 11:00　チンギス・ハーン国際空港着 13:45　チンギス・ハーン国際空港発（フンヌ・エア MR-659） 18:45　富士山静岡空港着 19:30　解散	——

訪問団名簿・報告書掲載ページ

氏名	所属校	学年	ページ
赤堀 蒼介	科学技術	2	1
石井 里桜	浜松工業	2	5
石野 結希	清水桜が丘	3	9
内山 叶悠	清水南	1	11
海老名 杏	焼津中央	2	13
大倉 和真	静岡市立	2	17
片山 柚季	伊豆中央	2	21
齊藤 秀平	駿河総合	1	25
齋藤 紗々	浜松南	1	29
佐野 利奈	ふじのくに国際	1	33
澤木 美依奈	浜名	3	35
島崎 太輔	浜松聖星	2	37
清水 瑠葵	浜松学芸	3	41
竹平 桃	富岳館	2	45
中木 夏美	浜松北	2	47
西島 ブリアナ	静岡サレジオ	1	51
長谷川 葵	藤枝東	3	55
播磨 イチロウ	池新田	2	59
本田 和佐	御殿場	2	63
宮部 恵麻	静岡城北	3	67
小田切 香子	教育政策課政策推進班長		－
河村 実嘉子	教育政策課主任		－
大島 遼平	教育政策課教育主査		－
増田 紀子	浜名高校養護教諭		－

令和７年度　モンゴル国高校生相互交流事業　事後レポート

静岡県立科学技術高等学校　２年　都市基盤工学科　赤堀 蒼介

「応募の理由」

私は高校で土木や街づくりについて学んでいます。その中で、日本は地理的に特殊で工事や建築が比較的困難な環境にあることを知りました。山地が多く、用地が限られていたり、標高差があり平坦な土地が少なかったりするため、工事するにあたって様々な工夫が必要なのです。そんな中、「海外ではどのような街づくりが行われているのだろう」と考えていたところ、学校で本事業の募集要項のチラシを見つけました。モンゴルは乾燥した気候で降水量が少なく、国土の大半が平野という内陸国です。日本とは正反対ともいえる地理的条件を持った国でなら、普段は得られない新たな視点を得られると考え、応募しました。モンゴルは鉱業の発展で急速に発展している国でもあると知ったので、新しい建物やインフラ設備、さらに急な都市化による問題を体験できることを楽しみにしていました。

「活動内容」

１日目

車で空港に向かう道中、飛び立つ飛行機を見て「本当に海外へ行くんだ」という実感がわいてきました。チャーター便はモンゴルの航空会社だったため、搭乗員の方もモンゴル人でした。飛行機に乗るのは初めてだったので、離陸の際は興奮して一気に目が覚めました。機内では人生初の Beef or Chicken?を経験しつつ無事チンギス・ハーン空港に着きました。
いざ空港を出ると、なんと空が広いことか。モンゴルの地を足で踏みしめ、海外が本当に存在することを確認できた夜でした。

２日目

朝ホテルを出てウランバートルからドルノゴビまでバスで移動しました。所々に牛やヤギの群れが見られ、モンゴルらしさを感じました。見渡す限り何もない地平線がひたすら続き、動画をとってもまるで静止画のような風景でした。ドルノゴビの門に着くと、強風の中、現地の高校生たちが出迎えてくれました。そのあと遊園地で再会して、モンゴルの伝統的な踊りを披露してもらいました。踊りを教えてもらいながら、一緒に踊ることができ、とても楽しい時間でした。ペアの高校生と一緒に様々なアトラクションを回りましたが、バイキングは別格の怖さでした。異国の地での死を覚悟しました。たくさん話も出来て、心に残る思い出深い夜です。

３日目

午前中はドルノゴビ県歴史博物館を見学し、副知事を表敬訪問しました。モンゴルでは県の職員の方々も胸板が厚く、かっこよかったです。学校交流ではマツケンサンバを披露しました。少し緊張しましたが、踊りきることができたので良かったです。モンゴル文字の縦書き文字を教えてもらう時間では、お互いの名前をそれぞれの言語で書いて交換しました。日本の遊びの紹介では、ジェスチャーや洋楽も使って伝えることができ、言語の壁を越えてコミュニケーションの楽しさを感じました。ジャルガランキャンプではモンゴルの音楽やくるぶし投げを見学できました。馬乳酒はとてもおいしかったです。夜は広場で音楽パーティが開かれ、みんな思い思いに音楽に合わせて踊って、中には歌を歌う人もいました。僕は終始モンゴル人のダンスを真似していました。

４日目

朝、黒い虫にパンツの中を噛まれて目覚めました。遊牧民宅訪問体験では、ゲルの工夫や訪問する際のルール・マナーを学びました。ラクダはとてもかわいく、背中の高さは想像以上で緊張しました。ハマリーンヒーデ寺院の見学は訪問前から楽しみにしていました。日本にはない圧倒的な大地の力を感じました。いざ日本の友人に電話しようとすると、電波が悪くなかなかスムーズに会話できませんでしたがパワーは送れたはずです。駅ではモンゴルの生徒とお別れの時間を過ごしました。電車が発車するまではかなり時間がありましたが、窓越しにスマホや紙にメッセージを書いてやり取りをしているうちに、あっという間に過ぎてしまいました。寝台列車は狭かったですが、そのおかげでみんなとの距離が近くなって会話も弾みました。夜景はとても美しく、時速数十キロのトイレも体験できて最高でした。

５日目

この日は、在モンゴル日本大使館を訪問しました。大使館の中に入ると、そこは日本でした。普段は気にも留めないスイッチの形状や天井の模様などからも、ひしひしと日本らしさを感じました。ウランバートルは静岡よりも都会的で、新しい建物が多く立ち並んでいまし

た。もともとは郊外にあったはずの火力発電所が街並みに飲み込まれていたり、山の上の方まで住居が広がっていたりと、日本では見られない景色ばかりでした。スフバートル広場には大きなチンギス・ハンの銅像があり、どこか東大寺に通ずることを感じました。ノミンデパートではお土産を買いました。モンゴルで主流のお土産がチョコレートであることには驚きました。通訳の方にアドバイスをもらいながら、楽しく買い物をすることができてよかったです。

６日目

モンゴルを離れる寂しさと、日本に帰れることへの安堵感が入り混じる中、帰国のフライトに乗りました。飛行機の窓から見える最後のモンゴルの風景を目に焼き付け、眠りにつきました。日本に着くと、空気の重さと湿気を強く感じました。迎えに来てくれた家族の顔を見て、帰ってきたことを実感しました。

「終わり」

今回のモンゴル交流を通じて、自分の価値観が大きく変わりました。さらに、言語の壁を超えたコミュニケーションの楽しさと大変さを感じました。大切なのは言葉そのものではなく、伝えたい、話したいという気持ちだと実感しました。一方で、ペアの英語力がとても高く、自分がうまくついていけない場面もありました。それがきっかけで、もっと英語を話せるようになりたいという思いが芽生えました。海外に行くことの楽しさも知ることができたので、これからもさまざまな場所を訪れ、多くの人と出会いたいと思いました。

６日間ありがとうございました！

モンゴルで感じた食文化

静岡県立浜松工業高校
2年　石井里桜

1. 動機

私は昨年度学校の SSH という事業で台湾にある姉妹校に訪問した。そこで他国の人と英語で交流する楽しさを知るとともに日本と異なる食文化について興味を持った。そして今年度もまた海外での交流に挑戦し食文化についてもっと知りたいと考えていたところ、ちょうどモンゴル派遣の情報を聞いて未知の国モンゴルへの興味がわいた。将来は食に関わる仕事で世界に健康を届けたいと思っているので今回参加することで世界の食事情を知るいいチャンスだと考えた。

2. 事前調べ

世界に健康を届けるという目標につなげるため今回注目したのはお茶である。理由としては私にとって1番身近な食品を考えた時に地元の特産品であるお茶がわかりやすいのではと思ったからだ。そして地元のものに着目することで、ただ健康を届けるだけでなく地域のPRに繋がると思った。まず静岡茶とモンゴルの代表的なお茶である“スーテーツァイ”の効果や飲まれ方を調べた。

（静岡茶）

・カテキンが多く含まれているため抗酸・抗菌作用が働く（健康維持）

・テアニンによるリラックス効果　基本的に食事のお供

→健康、美容、心身のリフレッシュ

（スーテーツァイ）

・塩分が入っているため体温調整や塩分補給になる　日常的な水分補給

→生活のエネルギー源、体を支える

このような違いがみられた。台湾のお茶には砂糖が入っていてほかの国でも割とあるらしいが、塩が入ったお茶は珍しいので、ますます飲んでみたいと思った。

3. 異国の地モンゴルへ

夜のフライトでドキドキしながらも眠り、深夜のモンゴルに到着した。とにかく夏とは思えないくらい寒く乾燥していて景色もよくわからない状態で変な感じだった。そしてバスに乗り込みついた先はまさかの日本の有名なホテル「東横イン」だった。朝食はバイキングでわくわくしていたがレタスの

代わりに白菜がおかれていて不思議でしかなかった。今考えてみると白菜は中国が原産なのでレタスよりも比較的安く手に入れやすいのかもしれないと思った。あときゅうりが異常に大きく中国の四葉きゅうりというものに似ていた。野菜はほとんど中国の輸入だとガイドさんも話していたので注目してみるとおもしろかった。

4. ドルノゴビでの食事

日本食はしばらく食べられないだろうと考えていたが、思っていたよりもお米のでてくる頻度が高く日本の米とかなり似ていて丸く1粒が大きかった。モンゴルに稲作のイメージはないのでお米も中国からの輸入品なのかと考えた。どの食事もおかずの量がとにかく多く、食べごたえがありプレートに1つでまとまっていることが多かった。しかし日本は1回の食事でも一汁三菜を基本につくられているのでモンゴルに行ってからは味変でもう1品食べたいと思うことが多く感じた。味付けの癖は少なく食べやすいものが比較的多かったと思う。ただ下の写真の1番右の料理が朝食で出てきて衝撃を受けた。ガイドさんが、「これは日本でいうおかゆのようなもので風邪の時に食べます」と説明があったので安心しきって食べてみた。しかし思っている以上に“動物の脂”という感じで、体力は付きそうだが日本人が風邪の時に食べるには向いていないなと思った。モンゴル人の胃の様子を知りたくなった。

（ティーバッグ）

食事についてくる飲み物はなぜか炭酸が多く、たまにお茶が出てきた。リプトンや韓国のティーバッグもおかれていたので、日本人に配慮してくれたのかもしれないと考えた。しかしリプトンの中でも初めて見る種類のものがあった。翻訳してみると、“強烈なミント”とかいてあって飲んでみると薬のような癖の強い味だった。

（馬乳酒）

歓迎の証として“馬乳酒”というものをいただいた。これもなかなか今まで飲んだことのない味をしていた。事前オリエンテーションで話題になっていたのでおびえていたが想像以上だった。匂いは普通のヨーグルトのような感じだったので安心したが口に入れた瞬間衝撃の酸っぱさが私を覆いつくした。ぜひみんなに飲んでみてほしいと思った。

（スーテーツァイ）

事前に調べていた伝統的な“スーテーツァイ”という飲み物も飲むことができた。最初はこんな暑い日にホットのミルクティー？と疑問に思った。しかし実際に飲んでみるとすごく飲みやすくてなぜ日本にないのだろうと思うくらいだった。しかしモンゴルの肉だらけの食事にこれは合うのか？と疑問に思った。

（クランベリージュース）

そんな中で1番美味しかった飲み物はクランベリージュースだ。毎日炭酸か“Bonaqua”（配付された水）しか飲んでいなかったので、久しぶりにビタミンCをとることができた気がした。モンゴルではクランベリージュースを疲れた時や風邪の時に飲むらしいが調べても出てこなかった情報なのでもう少し詳しく聞いておくべきだった。それと同時に実際に行かないとわからないことを知れて非常に良かったと思う。

5. これから

これらの経験を通して実際にモンゴルで静岡茶をすすめるのはいい案かもしれないかと考えた。その理由としてモンゴルは1回あたりの食事に対してかなりの量の肉がでてくるため、消化不良になりやすそうだと考え、それを防ぐためにはお茶に含まれるカテキンの消化促進作用が効くのではと考えたからである。しかしモンゴルにいってから静岡茶のような渋みと苦みがあるような飲み物はなかったため苦み、渋みが多いとあまり好まなさそうだと考えた。ただカテキンが多く含まれていると同時に苦みが増してしまうので、カテキンの量を減らさず飲みやすくする方法を考えた。それはお茶に含まれるうまみの部分に関わっているテアニンの量を一般的な静岡茶より多めにいれることだ。そうすることで苦み、渋みを和らげまろやかなあじわいに近づけることができるのではと考えた。

それに加えて日本でモンゴルのお茶をすすめるには、塩分補給になることを強く推したいと思った。日本の食事は基本的に塩分が高いので食事と一緒に飲んでしまうと塩分過多になる可能性が

あるので、食事とは別で夏バテ防止に飲むのがよさそうだと思った。モンゴルでは温まったものが主流かもしれないが、日本の夏に飲むとなったら冷やしてもよさそうだと思った。

6．最後に

やはりネットに書いてある情報はたくさんあるようで一部のことしか書かれていないんだと気づくことができた。ここには書ききれないことばかりで悔しいが食文化だけでなくたくさんの発見があったので、ネットの情報だけ見て知った気になっているのはもったいないなと思った。今回調べたことは来年の課題研究にいかし食について、世界について学びを深め将来自分の目標を達成できるようにしたい。

モンゴルの星空の下で

静岡市立清水桜が丘高等学校　3年　石野結希

1. 参加の経緯

初めて募集要項を目にした時、この事業に強く心を惹かれました。皆さんは「モンゴル」と聞いて何を思い浮かべるでしょうか。私は相撲やゲル、チンギス・ハーンといったイメージでした。学校の授業で、モンゴルの風土や歴史を学んだけれど、実際には十分には理解していない国であると感じていました。だからこそ、未知の文化や生活を自分の目で見て、体験し、よりモンゴルについて理解を深めたいという強い意欲から、この事業への参加を決意しました。

2. 日程

1日目

富士山静岡空港集合、モンゴルへ出国

2日目

ウランバートルからドルノゴビ県へ移動

遊園地にて現地校高校生と交流

3日目

ドルノゴビ県歴史博物館見学

知事表敬訪問

第6小中高一貫学校交流

バレーボール親善試合（スポーツ宮殿）

ジャルガランキャンプ

・遊牧民文化体験

・異文化交流

4日目

遊牧民放牧体験（ゲル見学）

ハマリーンヒーデ寺院見学

戦車丘見学

ドルノゴビ県からウランバートルへ移動

5日目

ウランバートル市内視察

在モンゴル日本国大使館訪問

解団式

6日目

日本へ帰国

3. モンゴルを訪れて感じたこと

学習意欲の高さ

現地高校生との会話は英語を介して行われました。英語は互いにとって第2言語であるはずなのに、流暢な英語を話す姿に驚かされました。また、コミュニケーションを交わしていく中で、英語力も大切ですが、相手に伝えようとする気持ちが重要であると感じました。私も英語が苦手なりに身振り手振りを駆使して一生懸命伝えようとすると、バディが一生懸命気持ちを汲み取って理解しようとしてくれて、段々と心が通じ合えるようになりました。さらに、現地高校生からは第2言語だけでなく、積極的に第3言語の取得に励んでいる子もいるという話を聞きました。実際に、現地高校生の中にも独学で日本語を勉強している子もいました。このように学びに貪欲な姿勢は私たちも見習うべき姿であると考えさせられました。

価値観や考え方の違い

アジアの国であり、隣国であるモンゴルと日本だからこそ、似通っている部分が多い印象を持っていました。しかし、実際にモンゴルで過ごす何気ない毎日の中で、価値観や考え方に差異を感じる場面がいくつもありました。例えば、モンゴルでのご飯の量は、日本人の私たちにとっては、かなり多く、なかなか食べきれないほどでした。後に、モンゴルでは「お客さんを空腹状態で帰さない」という理念を大切にしているから、ご飯の量が多いという話を聞き、腑に落ちました。また、首都ウランバートルでは交通渋滞が多く、よくクラクションが鳴ります。モンゴルでは日本ほど譲り合いの精神が定着しておらず、我先に行こうとする車が多いため、割り込みや追い越しが多いと聞きました。このように、目に見える差異だけではなく、実際に現地に足を運び、現地の人や環境に触れて初めて分かる価値観や考え方の違いを身を持って感じられたことは大きな成果でした。

4. 最後に

今回の事業を通して、何よりも1番大切なことは、挑戦する勇気をもつことであると改めて実感しました。事業に参加する勇気を出して一歩踏み出したからこそ、モンゴルでの貴重な経験を経て、世界が広がりました。また、実際にモンゴルを訪れたからこそ気付いたことや感じたことが多々ありました。AI が発達し、情報で溢れる社会になりつつあるからこそ、体験することや自分の目で見て確かめることを大切にしていきたいです。最後に、私がこのような貴重な経験をすることができたのは、静岡県の職員のみなさん、学校の先生、家族、一緒に5泊6日を過ごした仲間、現地高校生やガイドなど、数え切れないほど多くの人の支えがあったからこそと感謝しています。ありがとうございました。

現代社会と伝統の共存

静岡県立清水南高等学校
内山　叶悠

最初に私がモンゴルにいこうと思った理由はモンゴル舞踊について学びたいと思ったからです。モンゴルは世界でも珍しい遊牧民族文化が今でも存在しており、その伝統文化はどのようにして現代と共存しているのかを知りたいと思ったからです。モンゴル舞踊は私が部活動で取り組んでいるジャズダンスと多くの共通点があり、モンゴルで学んだ伝統舞踊を部活動の仲間や踊りにも反映していくいい経験であり、自分にとってもダンスの見方や意識を変えるいい機会だと思いました。

1日目は深夜便でモンゴルへと旅立ちました。まだ一緒にいく約 20 名と会うのは3回目で、私は2回のオリエンテーションを通してもみんなとは緊張してあまり馴染めなかったので空港では積極的に話そうと決めました。空港ではみんなで写真撮ったり、モンゴルで何が楽しみなのかを話したりすることでみんなの中でモンゴルに行くという実感と絆が築けたと思います。静岡国際空港から夜 10 時に離陸し、飛行機ではメンバーとモンゴルでしたいことを話しました。モンゴルについて最初に思ったのがとても寒いということです。モンゴルの気温は 17 度と日本と比較すると大変寒く感じました。ホテル到着は深夜3時でした。

2日目の午前中はバスで首都のウランバートルからドルノコビ県に行きました。ドルノコビ県の入口であるサインシャイド郡白門で学校交流のペアの方々が出迎えてくれました。私のペアのツゥゴスは日本語検定を持っていて私を日本語で挨拶してくれました。夜の遊園地交流では私の研修テーマであるモンゴル舞踊について教えてくれました。モンゴル舞踊の音楽は独特のリズムを刻んでいて音がとりにくかったですが、ペアのツゥゴスが根気よく教えてくれました。また反対にツゥゴスに日本語や日本の文化について英語で説明することができました。私とツゥゴスはお互い英語があまり堪能ではないのでところどころ通じないところがありましたが、ジャスチャーや翻訳機能などを使って意思疎通をしました。ツゥゴスはすごく日本語が上手で、常に笑顔なので私も緊張がほぐれてこの異文化交流を楽しむことができました。言語が違っても工夫をして互いに歩み寄る姿勢を持つことが大切だと思いました。

3日目はモンゴルの現地の学校での交流です。私はマツケンサンバを披露し、日本の食文化について、インスタントラーメンと緑茶を振る舞いました。モンゴルの人たちは日本のインスタントラーメンをすごく気に入ってくれて、想像より多くの人が食べてくれましたが、緑茶はあまり口に合わなかったようです。昼食は最初に日本ではあまり目にしない緑のスープが出てきて文化の違いを感じました。その後羊肉のご飯が出てきました。モンゴルにきて初めての羊肉でとても美味しかったです。その日宿泊するキャンプ場に着いたときに私たちのバスを先導してくださっていたモンゴルの警察の方と写真を撮りました。

4日目は現地の遊牧民族のお家にお邪魔しました。そこで9歳の女の子と仲良くなりました。日本のキャラクターがついた指輪を見せてくれました。ラクダや馬に乗っている時も私のそばにいてとても可愛かったです。英語は通じなかったので翻訳機能で会話しましたが手を繋いでくれたり一緒に踊ったりしてくれました。私の髪の毛を結んでくれたお礼に私が日本のお菓子をあげるとすごく喜んでいてとてもいい思い出になりました。現地の遊牧民族はバイクで羊たちを誘導するなど、現代の技術も一緒に使って伝統的な生活をおこなっていることを知りました。夕食後は学校交流のペアとお別れの時間でした。ツゥゴスはいつも私のことを気遣ってくれてモンゴルについて様々なことを教えてくれました。ツゥゴスは、私が寝台列車に乗る直前までずっと手を振ってくれました。言語や文化が違い、3日間という短期間の交流でもお互いがお互いの文化について知りたいという気持ちを持つことでお互いを理解できる関係になれることを学びました。

５日目はウランバートル市内視察でした。ずっと草原が続いていた景色だったのでビルやマンションが立ち並ぶ景色とのギャップに驚きました。まず希望の丘に行き、モンゴルの他の国との交流についての歴史を学び、美しい景色を堪能しました。次にモンゴルの日本大使館に行き、日本大使館で働いている方のお話を聞かせていただきました。日本大使館の方からモンゴルの都市部と地方の様々な違いを教えてくれました。モンゴル都市部での平均年齢は地方に比べて低く、年齢を重ねていくと遊牧民族の生活に戻るためだそうです。その後は歩いてスフバートル広場に向かいました。今まではバス移動で市内を歩いて移動するのはとても新鮮でいろんなところを写真を撮りました。スフバートル広場にはチンギスハーンの像があり、そこで結婚式の写真を撮っている人がいてモンゴルの人にとってチンギスハーンは誇りであり、国の象徴だと改めて実感しました。チンギスハーン博物館ではモンゴルの歴史について学びました。モンゴルという国は日本とはあまり関わりがないと思っていましたが、歴史上から見るととても深い関わりがあり、新たなことをたくさん知ることができました。

ホテルに戻り、解団式をしました。解団式では1人1人がモンゴルで学んだことや体験について発表しました。1人1人のモンゴルで思ったこと感じたことを聞いていくうちにまだこの仲間達とモンゴルにいたい、もっとモンゴルについて知りたいという思いが芽生えてきました。

ついに最終日。バスに乗って空港に向かう車内でガイドの方々の話を聞きました。たった6日間という短い期間の間にガイドの方々は様々なことを私たちに教えてくれました。異国の文化を体験するということはこれからの人生とても大切なことであり、忘れてはいけないと話しました。また人生は失敗を恐れず、人と人との縁をこれからも大切にしようと教えてくれました。帰国後はこの 20 名とは 10 月以降会うことはないのかと思うとすごく寂しくて悲しかったです。みんなでモンゴルに行けたこと、みんなでモンゴルの文化や生活を体験できたことは本当に私の人生のおいて大切な経験になりました。

モンゴルで私は2つのことについて学びました。1つ目は現代的な便利さを取り入れながらも、昔からの伝統を守り続けている姿勢の大切さです。モンゴルの人々は自国の文化である遊牧民族文化を誇りに思っています。都市部にはビルや車が並び、私たちの生活と大きく変わらない光景がありましたが、一方で遊牧民族はバイクで放牧をしたり、伝統衣装を日常的に着て暮らしていました。その姿を見て、伝統と現代社会は共存できると思いました。モンゴルの人々にとって遊牧民族文化は身近なものであり自分たちがモンゴル人であるという意識を強める基盤になっていると思いました。この経験から私は、自分自身も日本の文化や地域の伝統をもっと大切にしながら、新しいものを柔軟に取り入れることが重要だと学びました。

2つ目は「人との繋がりに感謝する」ということです。今回のモンゴルの旅では私は様々な人に支えられていました。家族や先生、友達に励まされ、モンゴルではペアのツゥゴスや 20 人の仲間たち、ガイドをしてくださった MC さん、テムさん、エバさん、現地であった遊牧民族の女の子や馬やラクダに乗るための補助をしてくれた男の子などたくさんの人と交流することができました。文化や言語という隔たりがあってもお互いに仲良くなりたいという歩み寄る姿勢が大切だなと本当に実感しました。たった6日間の旅で私はたくさんの繋がりを感じました。異文化理解というのはなかなか外に出ないと体験できないものであり、人によっては異質で不安に感じるかもしれません。しかし実際に体験しないとわからないこと、お互いの文化について考えることで自分たちにも共通点があること、違いを認めることが異文化理解において大切なことであり、これからの国際社会を生きる私たちにとって持つべきものだと感じました。

将来は国際的な場面でこの旅の学びを活かし、自分の文化を誇りに思いながら他国の文化も尊重できる人になりたいと思います。

モンゴル国での経験を通して

学校名:静岡県立焼津中央高等学校　2年
氏　名:海老名　杏

１．はじめに

私は高校生になってから、たくさんの経験をしてみたいと思ってきました。高校生という大人になる期間に経験したことは一生心に残るものだし、これからの人生の糧になると思うからです。今までも様々なことに挑戦してきました。しかし、子供のころからずっと憧れである海外には1度も行ったことがなかったため、今年は海外に行きたいという思いが強くありました。そんな時に、このモンゴルへの派遣事業を知り、モンゴルというあまり身近ではない国に興味を持ったので、絶対に参加したいと思い応募しました。せっかくモンゴルに参加させていただく機会をいただいたので、私は、今回の研修では、積極的に行動、交流することを目標に参加しました。

２．活動報告

私はこの研修ではじめて飛行機に乗り、はじめて海外に行きました。だから、研修の日が近づくにつれ、支度をしながら、楽しみとともに不安が大きくなっていました。しかし、始まってみればそんな不安も吹き飛び、明るい仲間と充実した、かけがえのない6日間を送ることができました。そんな濃いモンゴルでの6日間をまとめていきます。

【1日目】

富士山静岡空港からモンゴルのチンギスハーン国際空港に向けて移動しました。約4時間の私の人生初フライトは大きく揺れることもなく快適で、これから始まる研修に胸を躍らせながら、友達と話したり、寝たりしながら過ごしました。そうしているうちにいつの間にかチンギスハーン国際空港に到着していました。オリエンテーションのときにこの空港は日本の援助によってできたモンゴル初の

国際空港だと聞いていました。実際に足を踏み入れると、想像以上の空港のきれいさだったので感動しました。この日は深夜にホテルに到着したので、すぐに眠りたかったのですが、お風呂に入るとシャワーが冷水しか出なかったので驚きました。初日からこのような海外ならではのトラブルがあり、ついに海外に来たと実感することができ、これからの5日間に期待が膨らみました。

【2日目】

2日目は静岡県と交流関係を結んでいるドルノゴビ県への移動から始まりました。ウランバートルからの移動はバスで9時間。都市を離れると一面の草原が広がり、馬や羊の群れが見え、その合間に突然町が現れる光景に感動しました。ガイドの明るい方々のおかげで、長い移動も楽しい時間でした。到着すると現地の高校生が迎えてくれ、ペアの生徒と英語で自己紹介をし、これからの交流が楽しみになりました。 夜には遊園地で交流があり、伝統舞踊を鑑賞して一緒に踊ったり、ペアの高校生とアトラクションを楽しんだりしました。夕焼けや地平線が見える広大な遊園地はとても印象的でした。 しかしここで、言葉の壁の大きさを痛感しました。英語を勉強していたため多少は伝えられると思っていましたが、自分のことを言えず、相手の言葉も理解できず、悔しい思いをしました。それでも、その経験を無駄にせず、翌日からは身振り手振りや翻訳機を活用して積極的に行動しようと気持ちを改めました。

【3日目】

この日は学校交流やキャンプファイヤーが特に印象に残りました。交流校では日本文化の紹介やスポーツ交流を行い、互いに歌や踊りを披露し合いました。バレーボールの試合は大いに盛り上がり、国を超えて一体感を感じられました。 夜のジャルガランキャンプではキャンプファイヤーを囲み、大音量の音楽に合わせて踊りや歌を楽しみました。日本・モンゴルの垣根なく仲を深め、忘れられない時間となりました。

【4日目】

ゲル見学、乗馬・ラクダ体験、寺院訪問などを行いました。ゲルの構造や生活の知恵から伝統の力を強く感じました。ラクダ乗りではその迫力に圧倒されつつ楽しみ、ハマリーンヒーデ寺院では日本とは異なる仏教文化の一端を学ぶことができました。 夜はドルノゴビ県の高校生と再会しました。言葉が十分でなくても、ジェスチャーや気持ちで会話でき、友情が深まることを実感しました。別れの時には涙があふれ、国を超えた絆を築けたことを嬉しく思いました。

【5日目】

ウランバートル市内を視察し、ザイサン丘やノミンデパート、チンギスハーン博物館などを訪れました。在モンゴル日本国大使館では、人口や暮らし、日本との関わりについて説明を受け、理解を深

めました。夜の解団式では研修で学んだことを振り返り、仲間への感謝の思いが強くこみ上げました。

【6日目】

チンギスハーン国際空港から帰国しました。モンゴルを離れるのは寂しく感じましたが、日本食を楽しみにする気持ちも大きかったです。無事 4 時間のフライトを終え、帰国しました。

３．この研修を通して

この研修を通して　私はこの研修を通じて、人との関わり方や海外での振る舞いを学ぶことができました。特に「友情に国境は関係ない」ということを実感しました。大切なのは、相手とどう関係を築いていくかという姿勢であり、それは日本でも世界でも共通であると学びました。英語が十分でなくても「伝えたい」という思いがあれば方法は必ずあることも実感しました。　また、違いに戸惑いながらも、自分で工夫したり仲間と協力したりして乗り越えることができました。今回得た経験や学びを、将来や社会に役立てられるようにしていきたいと思います。今回の研修は私にとってかけがえのない人生**の糧となりました。ありがとうございました。**

モンゴル国交流　～ここでしか経験できない最高のひと時を～

静岡市立高等学校　2年　　大倉　和真

1．はじめに

私がこの交流事業を知ったのは、学校での募集最終日だ。高校生になったら海外に行ってみたいと思っていた私は教室の後ろに小さく掲示されていたプリントを見て応募することに決めた。結果が出て行けると決まった時の喜びは今でも忘れない。

そして8月４日から9日の6日間モンゴル（ウランバートル市，ドルノゴビ県）を訪問した。

2．６日間の旅

【1日目】

初めての海外フライトということもありとてもワクワクして富士山静岡空港についた。出発は 20:30 と遅めだったが、フライト中に見下ろした夜景やこの日に出会った友達との会話を楽しんでいたらチンギス・ハーン国際空港に到着した。到着後は現地でガイドをしてくださるエバさんなどが温かく出迎えてくれた。モンゴルの夜は気温が低く半袖で肌寒かった。東横インに向かうバスは内装がネオン街のように光っていた。

【2日目】

この日は1日かけてウランバートルからドルノゴビ県まで 400 キロ以上をバスで移動した。ウランバートルから離れ、見渡す限りの地平線や羊やヤギの群れを間近で見ると改めてモンゴルに来たことを実感した。途中の道の駅で食べた昼食は肉料理ではあったが癖がなくとても美味しかった。ドルノゴビ県に入る門では現地

の高校生がとても温かく出迎えてくれた。ここでドルノゴビ県をともにするバディと会ったり、伝統的な乳製品のお菓子である「ビッツ」を食べたりした。この日の最後には夜の遊園地を楽しんだ。ホテルの家電には中国系や韓国系のメーカーの製品が多く使われていた。

【3日目】

この日はまずドルノゴビ県の歴史博物館を訪れた。恐竜時代からチンギス・ハンの統治下、現代まで、剝製や貴重な資料を見て歴史を学んだあと知事表敬訪問を行った。馬頭琴の絵が入ったタンブラーなどをプレゼントとしていただきとてもうれしかった。改まった雰囲気の中で改めて静岡県を代表してきているということを感じた。その後、第6学校を訪れ現地の書道やお互いの国を象徴したダンスなどを披露し、最後には各ブースに分かれて日本文化をレクチャーした。ダンスのときに踊った盆踊りは今でもちゃんと踊れていたのか疑問だ。この後スポーツ交流としてバレーボールも行ったがとても白熱した試合になり、スポーツが苦手な私でも楽しかった。ジャルガランキャンプではモンゴル相撲を見た後、現地の高校生と歌って踊って夜のステージを楽しんだ。真夜中になって見た、星が輝く夜空や流れ星はとても美しく、一生忘れない絶景だった。

【4日目】

4日目はついに待ちに待った乗馬・乗ラクダだ。まずは遊牧民の人のゲルを訪れ日差しが差し込むように設計されている窓の位置など伝統的なゲルについての説明を受けた。その後乗馬・乗ラクダ体験を行ったが、乗馬は僕たちが普段レジャーで訪れる牧場などで行う乗馬体験と気分が違い、草原の壮大さを感じた。ラクダに乗ると3メートルほどあり、思っていたより高く揺れもあったが初めての経験でとても楽しかった。草原には日本では見たことのないような虫や草が生えていて地面に注目して歩くのもいい。これらの体験

の後、赤い石で一面が敷き詰められたパワースポットを訪れ寝そべってパワーをチャージした。このパワーはLINEのビデオ通話などを通してオンラインでも送れるらしい。

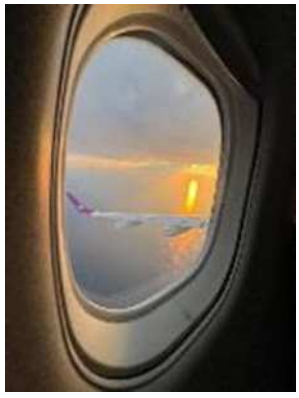
夕飯は知事主催の夕食会で歌手による生歌付きの豪華な食事を楽しんだ。この日移動中に羊が道路を横断するシーンに遭遇し、「The モンゴル」を感じた。夜には寝台列車でドルノゴビ県を離れるため2日間で関係を深めた現地の友達との別れがあった。寝台列車の中は少し狭かったがその中でより一層、友達との仲が深まったり、時間と共に変化していく草原の景色を楽しんだりとてもいい時間を送れた。

【5日目】

この日はまず東横インを訪れシャワーを浴びた。2日ぶりのシャワーはとても気持ちよかった。ザイサン丘を訪れこれまで見ることがなかった火力発電所や木が生えた山などウランバートルを一望した。次にノミンデパートを訪れ買い物をしたが160,000トゥグルグは桁の多さのわりに少なかった。

その後、日本大使館を訪れて人口や日本人在住者の数などモンゴルと日本の関係について学んだ。トイレにはウォシュレットがついていたり、手すりがどこかで握ったことのあるような木でできていたり、大使館内では久しぶりに日本を感じた。最後に、「VIVANT」でおなじみ、スフバートル広場やチンギス・ハン博物館などモンゴルを象徴する場所を訪れた。この日の夕食は馬頭琴の演奏付きで羊の内臓が入った餃子のような食べ物を食べた。ここにきてイメージ通りのモンゴルっぽい料理を食べた。

【6日目】



この日は朝食を食べた後、すぐに空港へ向かい飛行機に乗った。1日目に同じ道を通った時にはわからなかったウランバートル市街地を楽しんだ。この6日間が楽しすぎてまだまだこの仲間と、モンゴルにいたい気持ちを惜しんだ。ここまで付き添ってくれたガイドさんと別れ飛行機に乗り込んで気づいたら無事、富士山静岡空港についていた。最高の旅を終えた。

3. この交流を通して

この研修を通して私が一番に思うことはチャレンジすることの大切さを知れたことだ。掲示されているポスターを見ても応募しなければ、この交流で出会った仲間、感動、新しい学びを経験することはできなかったかもしれない。当たり前にお湯が出る、蛇口から出る水が飲める。これが当たり前じゃないことを実感した。大自然に囲まれて育ち、私たちに親身になって接してくれたモンゴルの友達たち。この交流事業で得た経験はたくさんある。この経験に感謝し、いろんな人に伝えていきたい。この経験を糧にしていろいろなことにチャレンジし続けたい。

静岡県の職員の方々、引率の先生、ドルノゴビ県の職員の方々、モンゴルの友達たち、現地でガイドしてくださったエバさんたち、そしてこの旅を一緒に過ごした、仲間のみんな最高の旅をありがとうございました。

忘れられない、モンゴルでの思い出

学校名：静岡県立伊豆中央高等学校
氏　名：片山柚季

１．応募の経緯

私は将来様々な国の人とコミュニケーションを取りたいという夢と将来医療系の職に就き、世界中の人々を病気から守る手助けをしたいという夢があります。その一歩として、異文化や海外の人と直接触れ合うことのできる今回の研修を志望しました。言葉が通じなくてもどうすれば思いが伝わるかを現地での交流を通して学び、そこで得たことを今後海外の人とも同じ日本人との繋がりの間でも生かしていきたいと思いました。

Day1

渡航当日。静岡富士山空港から５時間のフライトを経てモンゴル国にあるチンギス・ハーン国際空港に到着しました。集合時間の前は初めて訪れる国への期待や楽しみの気持ちがある一方、学校や学年が違う参加者たちと約１週間にわたって海外に行くということに不安や緊張も感じていました。しかし、空港で同じ研修生と一緒にたくさん話し打ち解けることで不安な気持ちが楽しみへと変わりました！モンゴルに着くと日本との気候の差に驚きました。現地はステップ気候であり湿度が低く気温も低くて過ごしやすかったです。また空港では深夜にも関わらずガイドさんが迎えてくださり温かい歓迎に心が和みました。

Day2

朝からバスに乗り首都ウランバートル市から約 450km 離れたドルノゴビ県へ約6時間かけて向かいました。首都は日本でも見かけるようなチェーン店や高層ビルが立ち並んでいましたが、次第に、モンゴルの伝統的住居のゲルを多く見るようになり、やがて広大な草原と広い空、美しい地平線が見えました。移り変わっていく景色は見ていて楽しかったです！そこで初めて数十、数百匹の放牧されている牛や馬、羊、やぎを見て、モンゴルらしさを感じました。また、海のように広がる青い空と広大な大地との境目にある一直線に伸びる地平線を初めてみてとても感動したことを今でも覚えています。世界の広さ、モンゴルの自然の美しさを大いに感じました。ドルノゴビ県に着くと、モンゴルの高校生たちが伝統衣装で出迎えしてくれました。笑顔で温かく歓迎してくれて嬉しかったです。夜は現地の高校生のペアの子と一緒に遊園地を回りました。そこではサプライズに現地の高校生が伝統的な踊りを披露してくれました。私はモンゴルの独特なメロディーと振り付けによりその踊りにはまってしまいました！その後は英語やジェスチャーを使ってお互いの趣味や好きな音楽などたくさん会話をしながら色々なトラクションに乗りました。ゴーカートでは壁にぶつかり続け、そこから抜け出せず、そのたびにスタッフさんに助けてもらうというハプニングもありましたが、モンゴル人の

親切さに感謝の気持ちを抱きました。空中ブランコは涼しい風を浴びながら赤色に染まる綺麗な夕暮れの景色を見れて大満足でした。ペアの子はとても英語が上手で聞きとるのが難しいことがありましたが理解しようとする気持ちと自分の拙い英語でも伝えようとする気持ちを持って諦めずに話しました。お互いに母国語が違う中でも伝えようとする気持ちを大切にし互いに理解しようと寄り添うことで会話が弾みお互いの距離を縮めることができてとても嬉しかったです！

Day3

この日は歴史博物館や県知事への表敬訪問を行い、モンゴルと日本の交流の歴史やモンゴルの歴史を学びました。その後、現地の高校に行き、現地の高校生と交流をしました。モンゴルの伝統舞踊や音楽を披露してもらい、モンゴルの伝統的な文化を学びました。私と同じ高校生が伝統的な踊りや音楽などを大切にし、文化や伝統を守り語り継いでいる姿はモンゴルの良さであり日本人も真似すべきことだと感じました。私たちも盆踊りを踊ったり日本に関するクイズをしたり習字や折り紙、けん玉、お茶を披露して日本の文化を伝えました。日本の文化を自分が思うように英語で伝えるのはとても難しく苦戦しました。ですが、現地の高校生が日本の文化を目の前で見て体験している姿はとても楽しそうで私も嬉しかったです。またスポーツ交流として一緒にバレーをしました。自分が普段部活動でやっているバレーも国境を越えて楽しまれているものだと感じスポーツは文化や言葉の壁を乗り越えて楽しめる世界共通のものだと実感しました。バレーを通して仲を深めることができとても良い機会になったと思います！そのあとは「ジャルガランキャンプ」という住宅や学校があるところから少し離れたキャンプ場に行きました。そこは見渡す限りの草原にポツンとあり空はとても広く綺麗な空模様、地平線、夜には星が綺麗に見えました。そこで夜は現地の高校生とキャンプファイヤーみたいなものをしました。火はありませんが、周りには何もないので大音量で音を流し、スポットライトを浴びながらみんなの歌を聴きその音にのって踊ったりジャンプしたり手拍子したり、みんなで一つの大きな円になって手を繋ぎながら歌ったりしてとっても楽しかったです！ありのままの自分になって言語などに関わらずみんなではしゃぎ楽しめるような時間でした。音楽を通して心が１つになった感じがします。

Day4

この日は遊牧民体験を主にしました。そこでは何百匹ものやぎと羊、また数十匹のラクダが放牧されていて日本では見られないこの光景にとても衝撃を受けました。馬とラクダに乗り、馬は想像以上にアンバランスで怖かったですがラクダはそれ以上に怖かったです。振り落とされるかと思いました笑　また教科書でしか見たことがないゲルの住居に入ってみると、その構造のユニークさに加え住居としての機能性や適応性に感心しました。ゲルに住む人々の生き方や生活から新しいものや環境を求めるのではなく今ある環境を大事にしその環境の中で最大限に楽しむ大切さを感じました。その後、パワースポットと呼ばれるお寺ハマリーンヒーデ寺院に行きました。そこはチェスを大きくしたようなものでお寺の周りが囲まれているなどと日本とはまた違ったお寺を見ることができとても新鮮でした。そこでは地球のエネルギーが湧き出る場所と言われる赤土に寝っ転がってたくさんのパワーをもらってきました！その後、県知事主催の夕食会に招いてもらい、モンゴルで有名な歌手の歌声を聞きながら豪華なモンゴル料理をいただきました。とても美味しかったです！そして戦車丘というドルノゴビ県全体が見渡せる展望台で現地の高校生と最後にたくさん話してたくさん写真を撮って、駅で別れを告げました。現地の高校生と過ごした3日間は本当に楽しく、あっという間でした。住む国、言語が違くても一緒にコミュニケーションを取れたこと、一緒に笑ったり別れを悲しんだりと気持ちを共有できたこと、たくさんの文化を教わったことはとても印象的であり貴重な思い出です。この交流で学んだこと、交流を通して感じた素晴らしさを今後の将来に生かしていきたいし、今後より多くの人に伝えていきたいです。また、この旅でできた国境を越えた仲間との繋がりを大切にし今後も連絡を取り合って交流を続けていきたいです。 夜は寝台列車で首都に戻りました。

Day5

とうとうモンゴルを視察できる最後の日。まずは首都を 360 度見渡せるザイサン丘に行きました。そこからの眺めは絶景で、首都の街並みは東京のようでドルノゴビ県とは全く違う景色が広がっていました。そこには軍隊の男性の銅像とその横にリングがあり、その内側の側面には旧ソ連に侵略されていた頃のモンゴルの軍隊や生活、社会の様子などが忠実に描かれていました。それらはとても立派で迫力があり、そこからモンゴルの歴史を感じました。チンギスハーン博物館ではモンゴルの大昔から今に渡るまでの歴史を学びました。王の象徴となるものや着ていた服装や道具、他の国との関わりなどモンゴルは日本とはまた違った文化や歴史をもっていて、見たり聴いたりしているうちにモンゴルの歴史に興味がわきました！またモンゴル帝国を建国したチンギスハンは、日本人にとってはかつて日本に攻めてきた敵であり英雄というイメージはありませんが、モンゴル人にとっては多くの功績をもたらしたモンゴルの象徴となる人物です。このように捉える視点によって事柄や

人物のイメージが大きく変わるということを実感して、もっと広い視野を持ち色々な視点から物事を見ることの大切さを感じました。今後は自分の視点から一方的に話すのではなく、相手の背景を知りその人の視点にも寄り添った言葉がけや行動をしようと思いました。そして最後にゲルをモチーフとしたお店でこの旅最後のモンゴル料理をお腹いっぱいになるまで美味しくいただきました！

Day6

ついにモンゴルとのお別れの日。モンゴルで見た自然や出会えた仲間、体験したこと、聞いた話、自分の肌で感じたことなどのたくさんの思い出を振り返えりながらバスで空港へと向かいました。そうするとモンゴルがとても愛おしく感じ、まだモンゴルにいるのに物悲しい気持ちになりました。最後にずっと旅の進行や翻訳をして旅をサポートしてくださったりバスの中では面白い話で旅を盛り上げてくださったりしたガイドの人たちに感謝の言葉を言って最後のお別れをしました。

～この研修を通して～

私はこの旅でモンゴル人のユニークさや優しさ、温かさをたくさん感じ、そこから言葉や文化、住む環境、価値観が違くても同じ人間であり心の底にある温かな気持ちは一緒であることを知りました。そのため勇気を出して相手と関わること、伝えようとする気持ちを1番にもって話すこと、お互いに相手を理解しようとすることが国際交流をする上でも普段の人間関係においてもとても大切なことだと感じました。 また、モンゴル人がもつ自然や動物と共存する姿勢や古くから伝わる伝統や文化を守り語り継ぐ姿勢、新しいものを求めずに今ある環境のなかで最大限に楽しもうとする姿勢は自分の考え方や今までの価値観を変え、新たな視野を与えてくれました。また私たちはモンゴル人のその姿勢からヒントを得て環境や他の国との関わりの面で将来へと生かしていかなくてはいけないと思いました。 私は今後モンゴルで学んできたことやその国の良さや国際交流の意義を伝えると同時に、他の国と比べて感じた日本の良さをもっと多くの人に伝えて日本の良さを再発見することにも繋げて行きたいです。また私の将来の夢である看護師になったら今回学んだ人との交流の仕方を生かして様々な背景を持った人に寄り添い、その人の立場や文化を理解した上で対応できるような人になりたいです。これからも積極的に国際交流を続けて異文化を知る大切さ、外国人の人とコミュニケーションをとる楽しさを感じ、より多くの人にその素晴らしさを伝えていきたいです。 今回の経験は私に取って忘れられない大切な思い出になりました。 この旅をサポートしてくれたガイドの方、近くで私たちを見守っていてくれた先生方、最高の思い出を一緒に作ってくれたモンゴルの高校生と一緒に参加した研修生に本当に感謝しています。

б а я р л а л а а ！！

令和7年度モンゴル高校生相互交流事業

Japan × Mongolia

静岡県立駿河総合高等学校　1年　齊藤　秀平

〖参加した理由〗

僕がモンゴル国・ドルノゴビ県高校生相互交流事業に参加した理由はこの企画を通して自分自身を大きく成長させたいと思ったことと、この企画で自然の素晴らしさ、モンゴルと日本の違いそして、外国人との交流の仕方について学びたいと思ったからです。

僕は将来、一人一人の患者さんの心に寄り添える看護師になりたいと考えています。患者さんの心に寄り添うためには患者さんと上手にコミュニケーションをとり、患者さんの想いや症状を読み取ることも大事だと思います。現在日本には多くの外国人が観光、仕事を含め訪れています。日本の生活文化と外国の生活文化がどれほど違うのか、実際に体験したいと思ったからです。

また、モンゴルはゴビ砂漠もあり、静岡県とは大きく違う所です。静岡は、海・山・川に囲まれ、富士山の恵みも多く受けています。そのため、様々な動植物も見られます。僕は小さな頃から魚捕りや昆虫採取をしてたくさんの生き物を見てきました。小さな頃は、富士山子どもの国のパオに泊まることもありました。キャンプが大好きで今でも家族と自然を楽しみます。モンゴルでも自然を満喫し、いろんなことに挑戦してみたいと思ったからです。

１日目

富士山静岡空港から飛行機でチンギスハーン国際空港へ。その日は夜で途中雷が鳴っていました。飛行機の中で稲妻を眺めるというとても貴重で不安な体験をすることができ序盤から少しテンションが上がっていました。モンゴルに着いてみると想像よりもはるかに涼しく、上着を着ていなかった友達は震えていました。その後はそのままホテルへいきました。ホテルはなんと日本でよく見かけるあの東横インでした。モンゴルのトイレでは紙が流せないためトイレの横にあるごみ箱に紙を入れます。これは思ったよりも大変ではなく匂いなどもあまり気になりませんでした。

2日目

朝の朝食は特にモンゴルらしいものは見つからず、野菜、パン、コーヒーなどでバイキングを堪能しました。そこからは7時間ものバスの旅でした。バスからの景色は移動していくにつれ都会から田舎へ、田舎から草原へと変わっていき、特にゲルがたくさんあったり羊ややぎがたくさんいるなど日本では見ることができない景色をたくさん見ることができました。バスの中ではガイドさんがモンゴルについて教えてくれたり曲を流してくれたり(爆音で)とても楽しい時間を送ることができました。途中のお昼ご飯では4種類の肉料理を友達とじゃんけんで決めて食べました。主に牛肉や鶏肉が多くとてもおいしかったです。夜には現地の高校生と遊園地へ行き、空中ブランコや観覧車に乗りました。まわりが草原で景色がとてもきれいでした。観覧車の横の窓はガラスかと思ったら下敷きのような強度であわてて後ろの窓を確認したらなんと鉄格子だけで手が出せてしまいました。その分風がよく通り最高な空間でした。

3日目

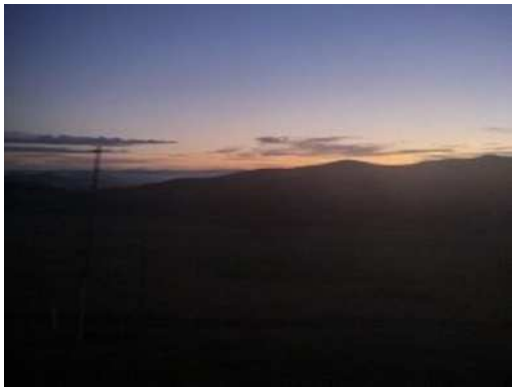
歴史博物館を見学したあと知事表敬訪問を行いました。次にウランバートルの学校へ行きました。この学校は小学校、中学校、高等学校がすべて一貫で日本との違いをまた感じました。そこでは交流を行い互いの文化や国について体験・紹介を行いました。学校食堂でお昼ご飯を食べました。その後ジャルガランキャンプへ行きモンゴルのお酒馬乳酒を飲みながら文化体験を行いました。馬乳酒は酸味が強くヨーグルトに似た味で僕はおいしく感じました。ここでは伝統の楽器での演奏(あの馬頭琴やモンゴル相撲を楽しむことができました。夜はクラブのように爆音で曲を流し、ライトもありクラブのようにみんなで飛び回りとても盛り上がりました。その後星を見に行き僕は大きな流れ星を見ることができました。この日はシャワーを浴びれることができず、風呂キャンセルを体験しました。

４日目

すがすがしい朝目の前に広がる大草原を見ながら、散歩をしました。とても涼しく鬱陶しいものが何一つない最高な時間でした。ジャルガランキャンプを離れ遊牧民宅訪問体験へ。そこでモンゴルといえばのゲルの中を見学することができました。ゲルに踏み入れる足など細かいルールがありました。その後は羊とヤギの群れを追いかけまわし、馬とラクダに乗ることができました。馬は比較的乗るのが簡単でしたがラクダは乗るときが大変でした。特につかむところがこぶなのでラクダで移動するときはとても不安でした。この日は現地の高校生とのお別れの日でした。一緒に戦車丘から景色を眺め最後の時間を楽しむことができました。僕はペアとの最後の時間で腕相撲で勝負し完敗してしまいました。最後に電車に乗り現地の高校生と別れました。短い間だったけどとても悲しかったです。電車はとても狭く荷物を入れる時が大変でしたが友達とたくさん話すことができてとても楽しく過ごすことができました。

５日目

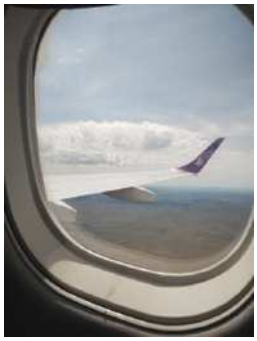
朝起きるとちょうど日が出ていて神秘的な景色を見ることができました。朝食を食べ、市内視察へ行きました。国立チンギスハーン博物館は9階建てでとても迫力のある場所でした。ザイサン丘ではウランバートルが一望できました。下調べでモンゴルでは物価が安いと思い込んでいましたが、お土産はなかなか値段が高くたくさん買うことができませんでした。スフバートル広場でガイドさんがバイクを運転させてくれました初めて運転したので楽しかったです。この日の夜はとても豪華な食事をたくさん食べ最後の



夜ご飯の時間を楽しく過ごしました。

6日目

いよいよ最終日ずっと一緒にいてくれてとてもお世話になったガイドさんと別れ飛行機に乗りました。行きの飛行機は夜で日本や中国、モンゴルの夜景を見ることができましたが、帰りはお昼だったので海や雲などまた違う景色を見ることができました。そして日本につき、みんなと別れ家に帰り素敵な六日間の旅は終了しました。



最後に

短い期間だったがこの企画で僕はいろんなことを経験し、いろんなことに挑戦できました。そして自分が大きく成長することができました。特に現地の高校生や現地の方々と関わることができ外国人とコミュニケーションをとる大切さと難しさ、言葉がなくても関わっていけることを実感することができた。この経験を自分の看護師という夢につなげていきたです。そのためにはモンゴル以外の国も理解し共通言語である英語に力を入れていきたいです。また今回の企画で、日本のいいところ、モンゴルのいいところ、そしてそれぞれの課題も見つけることができました。よりよくしていけるようにこれから自分にできることを探していきたいです。

モンゴルで初めての体験

静岡県立浜松南高校　１年　齋藤紗々

～　モンゴルでの生活　～

チンギスハーン空港に着き、飛行機を降りた時に感じたことは、気温の違いです。日本とは違い、空気が乾燥していて、とても寒かったです。夏真っ只中のはずなのに冬のように感じました。長袖の上着を着ていても寒かったです。しかし、日本にあるようなジメジメとしたかんじはなく、比較的過ごしやすい気候だなと感じました。

次の日、朝からバスに乗り、約７時間走り続けました。途中のお昼ご飯で寄った道の駅でのご飯はステーキを食べました。味は日本と少し違うなと感じていたけれど、食べ終わった後に羊の肉だということに気がつきびっくりしました。味は少し臭みがあり、日本のご飯で例えることが難しい、独特な味でした。夕方はついにモンゴルの高校生との対面です。サインバイノと学んだモンゴル語で挨拶をしたら、同じように返してくれて、そこで初めて繋がったように感じました。遊園地では一緒にダンスをしたり、英語でお互いの趣味や年齢などを話しながら仲を深めて、すぐに打ち解けあえました。

2日目の午前中は知事表敬訪問を行いました。そこで副知事さんから挨拶をいただき、私たちをモンゴルへ歓迎してくれました。モンゴル語での挨拶だったので、通訳さんを通してのお話でした。言語が通じないことを改めて感じ、自分はモンゴルにいるんだと感じる機会にもなりました。最後には、お土産として、タンブラーやボールペン、お菓子などをいただきました。今も大切に使わせてもらっています。

午後は第6学校との交流でした。モンゴルの伝統的な踊りを披露していただきました日本とは違い、派手な服装や豪華な演出で驚きました。日本からも踊りを披露したり、書道

や、日本の食べ物、遊びなどを楽しんでもらいました。モンゴルにも習字はあるけど、筆の持ち方や使う物も全然違いました。モンゴル習字で筆ペンも使っていたことに驚きました。モンゴルにも習字はあるけど、また、バレーの親善試合を行いました。日本VSモンゴルの対決も面白かったけれど、合同チームで行ったことがいちばんの思い出です。点を決めた時はハイタッチして喜び合うことで仲が深まりました。夜はキャンプをしました。モンゴル相撲を見たり、クラブのように踊って歌って盛り上がったりしました。

3日目は遊牧民族体験をしました。ゲルの中は思っていたよりも広くて、過ごしやすそうな空間でした。主に年に4回ゲルごと移動して生活することを知りました。

乗馬をしたり、ラクダに乗ったりと初めての体験が盛りだくさんでした。ラクダに乗るのは思っていたよりも揺れて怖かったです。しかし、モンゴルでしか経験できないことだと思い、学校や家で話して、広めていこうと思いました。夜ご飯は知事との歓迎夕食会に招待していただきました。最初から豪華な料理がたくさんでワクワクしました。味もとてもよく、美味しくいただきました。食べてる時には歌を歌ってくれたり、一緒にダンスを

して盛り上がりました。そして寝台列車へ行き、辛いですが、モンゴルの高校生とお別れをしました。

4日目は、ドルノゴビ県からウランバートル市へ戻りました。ノミンデパートへ行き、お土産を買いました。通貨も違い、大変かなと思っていたけれど、レジの人が親切に教えてくれて無事に買い物をすることができました。レジに並んでいる時に、前に並んでいた人が列を譲ってくれて、親切で優しい人が多いなと感じました。そのようなところもモンゴルの素晴らしさだと感じました。最後はスフバートル広場、チンギスハーン博物館に行きました。世界でも有名な場所で、なんと9階建てになっています。1万以上の展示物があり、その約9割が本物であることに驚きました。日本との規模の違いも感じました。

モンゴルの食事について🍚

モンゴルに行く前のイメージは肉しか食べないというイメージが強かったです。だけど、実際に行ってみると、生野菜も多くあったり、ほとんど米を食べていました。モンゴルの子に魚って知ってる？と聞くと、ツナと答えていました。モンゴルで出るものといったらマグロなのかなと日本との違いを改めて感じました。また、新しい発見も多くありました。1週間過ごしてわかったのは、モンゴルでは炭酸が頻繁に出ることです。おもてなしをしてもらっているからかもしれませんが、1日に2回ぐらいコーラやスプライト、ファンタが出てきました。外国は炭酸が主流なのかなと考えました。味もモンゴルの伝統料理以外は日本と変わらないようなものが多かったです。でも、量がすごく多くて全部はとても食べきれませんでした。でも、羊の内臓や肉など日本にはないものも多くありました。

（モンゴルでの最後の夕食）

（知事との歓迎夕食会）

旅を通して感じた事

私がこの旅で感じたことは自分の英語力の低さです。モンゴルの高校生は英語の先生並みにペラペラで、話していても意味を理解するのがやっとでした。英語は得意な方なので安心していましたが、外国に出てみると自分はまだ全然なんだと思い知りました。これを機にもっと英語力を向上させていこうというモチベーションになりました。そして、自分の視野の狭さにも気付かされました。外国に来てみて、まだ自分が知らないことが山のようにあると気づきました。文化だったり、言語などたくさんあります。モンゴルだけではなく、もっと色々な国に行ってみたいと興味が湧きました。今回の旅でも、水が出なかったり、お風呂が冷水だったり、トイレットペーパーがなかったりなど、困ることもたくさんありました。けれど、日本との違いを発見でき、感じ、絶対に成長できたと思います。みんなに伝えたいのは、成長し、視野を広げるためには今までできなかったことに挑戦するということです。心からこの旅に参加して良かったと思います。

異文化の風に触れてーモンゴル交流の記録

ふじのくに国際高校1年　佐野利奈

1. はじめに

このモンゴル交流事業を通して、私は知識や経験を深め、他者と協力する楽しさを学びたいと考えた。国や民族を超えたさまざまな人との交流は、私の今後の人生において豊かな経験となると思い、参加を決めた。研修先は憧れのモンゴルである。中学１年の冬、モンゴル国立馬頭琴交響楽団の公演を初めて鑑賞した際、その音楽に強く心を惹かれた。聴いたことのない楽器の音色や歌声に驚き、目を閉じるとモンゴルの大地や草原を駆け抜ける駿馬を想像することができた。私は、この交流事業の様々な経験を実際に体験することで、多くの学びと発見を得ることができた。

2. ゲル訪問とラクダ体験で知るモンゴルの世界

モンゴル滞在中、特に印象に残ったのはゲルを訪問したことである。実際に中に入り、ゲルのつくりや守るべきルールを学んだ。ゲルが丸い形をしているのは、宗教的に「悪いものが角にたまらないようにするため」であると教わった。また、部屋に入るときは右回りに進むという決まりがあり、生活の中に文化や信仰が息づいていることを知ることができた。遊牧民の方々がどのように日々を送っているのかを間近で見ることができ、自分の知らなかった暮らしがあることを実感した。また、ラクダに乗る体験もした。初めてのことだったので少し緊張したが、草原をゆっくり進むラクダの背に揺られながら、雄大な自然を肌で感じ、とても楽しい時間を過ごすことができた。この体験を通じて、モンゴルの自然と人々の生活が深く結びついていることを学んだ。そして、ラクダがモンゴルの人々にとって家畜としてだけでなく、移動や生活を支える大切な存在であることを知り、深い尊敬の気持ちを抱いた。

3. モンゴルの食文化を味わう

モンゴル滞在中に感じたことの1つは、食文化である。主な食事は肉料理であり、特に印象的であったのが羊肉である。羊肉は独特の香りと味であったさらに、馬乳を発酵させた馬乳酒（ばにゅうしゅ）も体験した。独特の風味があり、初めての味であったが、遊牧民にとっては生活や文化の中で重要な飲み物であることを知った。

4. 現地高校生との文化交流体験

印象に残ったのは、現地の高校生との交流である。学校訪問では互いに文化紹介を行い、私は日本の駒やお手玉、けん玉といった伝統的な遊びを紹介した。一方で、モンゴルの生徒からはモンゴル文字を教わり、実際に筆を使って書く体験をした。この活動を通して、互いの文化を直接学び合うことができた。また、一緒に遊園地を訪れた際には、モンゴルの学生が伝統的なダンスを披露してくれた。その後、私たちも踊り方を教わり、ともに踊った。言葉の壁があっても、音楽やダンスを通じて心を通わせ、共に楽しむことができた。このとき、音楽やダンスが世界共通の表現手段であることを強く実感した。さらに、ジャルガランキャンプでは一緒に夕食を食べながら語り合い、モンゴルの学校生活についての話や、ガールズトークを楽しんだ。国も言語も違うにもかかわらず、会話は弾み、すぐに友達になることができた。わずか2日間の交流であったが、互いに深い絆を築くことができた。別れのときには、ペアの生徒が涙を流してくれ、その姿に心を打たれた。短い期間でありながらも強く心に残る交流であった。

5. まとめ

これらの経験を通して、私は異文化理解の大切さを改めて実感した。特に、挑戦することの重要性を強く感じた。初めてのゲルに宿泊、ラクダ、文化交流、普段の自分の生活では考えられない挑戦であったが、その一歩を踏み出すことで、互いに心を通わせるつながりが生まれた。言葉や国籍が異なっても、共に遊び、踊り、話すことで友情が芽生え、短い期間でも深い絆を築くことができたのである。また、実際に他国へ行くことで、教科書や映像だけでは得られない学びがあることも実感した。モンゴルの生活様式や食文化、宗教的なルールなどを肌で感じ、現地の人々の価値観や考え方に触れることで、自分の視野が広がり、新たな考え方や価値観を受け入れる柔軟さを身につけることができた。このように、挑戦と異文化体験は、理解や信頼、友情といった具体的なつながりを生み、自分自身の成長にもつながる重要な経験であると感じた。今回、実際にモンゴルへ行き、自分の目で広大な草原や地平線の景色を見たときに感じた感動や驚きは、決して忘れることができない。この経験を今後も心に留め、学びや成長につなげていきたいと考えている。また、今回の体験を通して、さらに異文化や新しいことを学びたいという意欲が高まり、これからも挑戦し続けたいという気持ちを強く持つようになった。この交流は、私にとって学びと挑戦の大切さを改めて実感させる貴重な体験であった。

『チーム友達』な 6 日間！！

静岡県立浜名高等学校　3 年　　澤木　美依奈

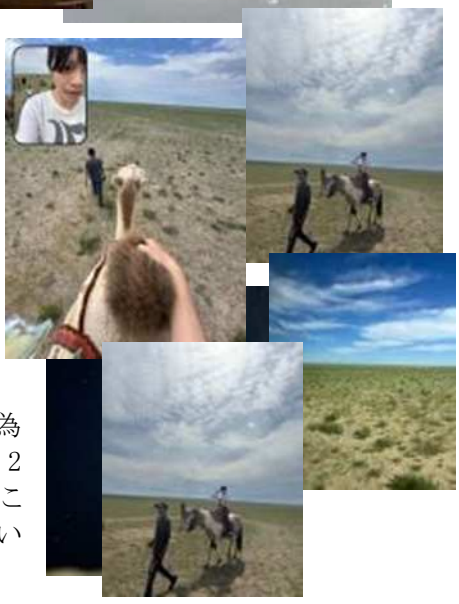
＜はじめに＞

大して語学力や対話力が長けているという訳でもありませんが、私は元々国境を越えたつながりや文化交流などに大変興味がありました。将来日本と海外をつなぐ「架け橋」となることが私の夢であり、そのためにさまざまな角度や機会で国際交流の事業に参加し自分の視野、世界を広げたいと考えています。その中で見つけたモンゴル交流もまた、私の興味を擽るものでした。私的な旅行で海外に行くとしても中々選択肢には上がってこないような国、世界史で多少は勉強をしていたものの、砂漠や遊牧民といったイメージしか当時は持ち合わせておらず、私的に謎が多いなと、もっと知れたら面白いだろうなと思える国でした。私は莫大な好奇心に駆られ、応募をした事を覚えています。

＜充実した食事＞

私は食べることが大好きです。特に自分の知らないような新しい味を知ることにとても興味があり、それもあって食事面は今回のモンゴルへの旅でも 1 位 2 位を争うくらい楽しみにしていました。知らない場所の知らない食事は最初からボリューム満点でとても驚きました。そして予想以上に口に合うものばかりでどんどん食べ進めた事を覚えています。そして思っていたよりラム肉は少なく、豚や鶏、牛肉の出番の方が多かった点にも驚きました。1 人、またグループでは食べきれないような量に苦戦しましたが、食べ応えがあって食事の時間がいつも楽しかったです。現地の方々のサービス精神には常に驚かされるばかりで、その度にとても嬉しかったし、代表生徒としての誇りもまた感じることができたと思います。

＜広大な自然＞



渡航前からモンゴルのイメージとして持っていた「広大な自然」を実際に目の前にすることもまた、大きな楽しみの一つでした。事前オリエンテーションの中で大島さんもおっしゃっていた「地平線」。私はみたことが無かったので、その景色をぜひ一度目の当たりにしたいと思いながら出発しました。首都ウランバートルから遠く離れたドルノゴビ県は私が予想していた、もはやそれ以上の広大な草原が広がっていました。生まれて初めてみることができた地平線の見える大地はとても綺麗で、とにかく風が気持ちよかったです。5km 先まで何もないと考えると中々想像しづらいですが、現地の広い大地を感じることができてとても嬉しかったです。また、ずっと楽しみにしていた遊牧民の家庭訪問で体験した念願の乗馬や乗ラクダは、高さもあり揺れて緊張しました。しかし実際触れてみると命の温かみを感じ、とても愛着が湧きました。標高が高く朝晩は冷える為か、夕日や星がとても綺麗で心奪われました。そこで私は初めて流れ星を 2 度も観測することができて、願い事を唱えることができました。夢の詳細はここで語ることはできませんが、モンゴルの空に願いをかけたおかげか、今いい方向に進みつつあります。このまま叶えばいいなと思うばかりです。

＜新たな交流＞

たった 2 度の事前研修以来に顔を合わせた同じ代表生徒 19 名に馴染めるかという不安の方が大きかったです。人見知りということもあって、前日まではあまり期待できない部分がありました。しかし当日になるとみんな手を振って声をかけてくれて、出発前も長い移動時間も沢山会話ができたことがとても楽しかったです。自分もこの集団の 1 部になれたんだという大きな喜びを感じることが出来ました。この日本人メンバーだけでなく、現地ではさらに多くの人と関わりました。エバさんをはじめとするガイドの方々や共に文化交流を楽しみ、高校生などと多くの機会で関わりを持ちました。ペアの高校生に「Сайн байна уу?」(こんにちは)と挨拶をすると笑顔で「こんにちは」と日本語で挨拶を返してくれてとても嬉しかったです。遊園地や学校、キャンプ場などで深い文化交流ができて、私の知らないモンゴルの音楽や舞踊、遊びなどを間近でみられてとても嬉しかったです。また、ペアの子は日本でも有名な J-pop の曲をよく口ずさんでいて、キャンプでのステージ発表では一緒に歌いました。少し緊張したけれど、場を盛り上げることができてとても楽しかったです。海外の友人と共通の話題を見つけられた事が何より嬉しかったです。交流する中で英語も拙く受け身になってしまった事が後悔として残っています。10 月は今より積極的に人々と関わりを深めていきたいです。

＜まとめ＞

私は昨年から本格的にテーマとして掲げている「多文化共生」に焦点を当て、異なる国々の人同士の関わり方について考えながら過ごしてきました。最初に述べたように私は英語が得意ではありません。学校の授業にはついていけるものの、リアルな英語を活用することは苦手でした。拙い英語と乏しいコミュニケーション力しか持ち合わせていないのでやはり心配はありましたが、ゆっくりでいいから聞かれたことに返答をする。そして何より表情や身振りなどをうまく活用するように心がけました。その度に相手は笑顔で頷きながら話を聞いてくれて、少しずつ話が広がっていくのがとても楽しく思えました。全体を通して私は、文化や言葉の違いを超えて理解しようとする姿勢こそが信頼の基盤であると実感し、多文化共生は日常生活の中で育まれるものであると考えるようになりました。昨年カナダで関わった人とはまた異なる人々に不安もありましたが、結局はみんな同じ、繋がっているなと強く思いました。先程述べた食事面や自然の他、モンゴルの歴史について学べるような機会を多く頂きました。教科書で取り上げる以上に奥深い内容で、チンギスハンのイメージしか無かったモンゴルの歴史が私の中で大きく広がった気がします。住んでいた生き物や自然の移り変わり、戦いの際に用いた旗や武器などの実物を見ることが出来て良かったです。日本の歴史とも繋がる部分も見られて、「この絵見たことある！」と発見できたのが嬉しかったです。表敬訪問でも多くの歓迎をして頂き、静岡の市の名前が貼られたラクダレースは見ていてとてもワクワクしました。非常に濃い 5 泊 6 日を過ごすことが出来て、代表生徒としてモンゴルへ行くことが出来て今は充実した気持ちでいっぱいです。また機会があればモンゴルに行ってみたり、友人など仲間にもモンゴルのいい所を沢山伝達したいと思います。「モンゴルなんて砂漠しかないでしょ」とはもう言わせません！ここで得た多くの学びを今後さらに深め広げていき、自分の探究にも還元していきたいです。最後に、関わってくれたたくさんの人に。『баярлалаа』!!

モンゴル交流事業を体験して感じたこと

学校名：浜松聖星高等学校
氏名：島崎 太輔

１．参加した経緯

私は以前より国際交流に興味があり、幼少期より続けていたボーイスカウト活動の一環で韓国に派遣されたり、学校で行われているスペイン語の講座に参加するなど中高を通して様々な活動に取り組んできた。そのようななかで 4 月下旬に学校の英語科の先生より募集の案内があり、未だかつて見たことのないモンゴルをこの目で見てみたいと思い、本事業への参加を決意した。

２．６日間の行程

初日は夕方に富士山静岡空港に集合し、その後飛行機に乗り、一路モンゴル・ウランバートルを目指して出発した。約4時間のフライトは機内食や夜景を楽しんでいるうちにあっという間に過ぎ、飛行機は現地時間深夜1時 30 分ごろにモンゴルのチンギス・ハーン国際空港に降り立った。とにかく眠気がする中で入国審査を終え、ホテルで落ち着けたのは 3 時を回ってからだった。

2 日目は首都ウランバートルからいよいよドルノゴビ県サインシャンドに向けてバスで出発した。途中のトイレ休憩や昼食休憩を含め半日以上バスに乗っていたが、窓の外には今までに見たことがないような景色が一面に広がっており、退屈することはなかった。そうしてついにドルノゴビ県に到着し、街の入口にある白門という門で現地の高校生から歓迎を受けた。現地の高校生は皆フレンドリーで、私もペアの高校生とすぐ打ち解けることができた。ホテルに荷物を置いた後、私たちは現地の高校生と一緒にサインシャンドの遊園地に行き、一緒に遊んだ。最初に現地の高校生による伝統的なダンスの披露と踊り方のレクチャーがあり、運動が苦手な私はかなり苦労した。しかし、私のペアに教えを乞いながら、最後にはなんとか形にできたことを覚えている。その後、私はペアの高校生と遊園地を周り、観覧車で拙い英語を駆使してお互いのことを語り合ったり、ゴーカートに乗って遊んだりした。話によると、ペアの彼は日本語を勉強しているらしく、今度N4を取るつもりだと教えてくれた。すかさず私も今は中国語を独学で勉強していることを告げ、お互いに外国語の習得を頑張ろうと励ましあうことができた。

３日目は沢山のイベントがあった。朝に街の博物館を訪れ、ドルノゴビ県の歴史や自然について学んだあと、ドルノゴビ県の県庁で副知事を表敬訪問した。この時、光栄にも訪問団の代表として挨拶をさせて頂くことになり、物凄く緊張しながらなんとか話しきったのを覚えている。その後、県庁では副知事のお話や以前ドルノゴビ県で静岡県との友好協定 10 周年を記念して行われたラクダレースの様子などを見させて頂き、お土産まで頂いて県庁を後にした。その後は、現地の第六学校という小中一貫校を訪問し、そこでモンゴルの伝統的な舞の見学やモンゴル文字の書道体験をしたのち、訪問団全員でダンスを披露した。私はダンスの音源の準備を担当し、無事に全曲問題なく流しきることができた。ダンスの披露の後は日本文化に関するワークショップを行った。私たち

のグループではチキンラーメンと緑茶の試食を行い、現地の高校生にもかなり好評を得ることができ、日本食の人気の高さを感じた。ワークショップの後は現地の高校生と訪問団の間でバレーボールの試合を行った。運動が苦手な私も駆り出され、最初にサーブを３本連続で成功させるなど健闘したものの、現地の高校生の前に敗れた。バレーボールで汗を流した後はジャルガランキャンプという場所に行き、現地の伝統的な遊びのくるぶし飛ばしを体験したりモンゴル相撲を見学して過ごした。夜には大自然の中で音楽をかけて盛り上がり、その後はコテージの前に出て星空を見たりした。あいにく天気はあまり良くなく、思っていたよりも満足する写真が撮れなかったのが残念だ。

４日目はジャルガランキャンプから出て遊牧民のゲルを訪問し、遊牧生活について知識を深めた。その後、彼らが飼っている馬やラクダに乗せてもらった。勿論ラクダに乗るのは初めてのことだったが、身長の二倍近い目線で雄大な景色を望むことができ、とても気分が良かった。その後はチベット仏教のハマリンヒード寺院を訪れ、神聖なパワーを得ることができた。ホテルに戻って一息ついた後、ドルノゴビ県副知事主催の夕食会に参加し、おいしい料理と歌、そしてダンスを楽しんだ。食事の後はサインシャンドを一望できる戦車丘でペアの高校生と歓談を楽しみ、サインシャンド駅からウランバートル行の寝台列車に乗り込んだ。駅では発車間際まで現地の高校生と話をし、再会を誓ってサインシャンドを後にした。車内で語らううちに夜も更け、いつの間にか眠りに落ちていた。

５日目は朝８時 30 分にウランバートル駅に到着し、ホテルで朝食を食べたのちに市内の各地を回った。最初にウランバートルを一望できるザイサン丘に登った後、ノミンデパートでお土産を買い、 日本大使館を訪問した後にスフバートル広場とチンギス・ハーン博物館を見学した。この中でチンギス・ハーン博物館は特に感激した。館内には歴史の教科書や本で見たことがあるようなものが多数展示されており、理系の私でも大変勉強になる展示がいっぱいだった。しかし、説明がモンゴル語のみで英語表記すらなく、撮影も禁止で翻訳アプリを出すのも気が引ける雰囲気だったため、気になるものがあってもわからないのが少し心残りだ。

６日目は朝食を食べた後にホテルを出て、チンギス・ハーン国際空港に向かった。いよいよモンゴルを離れるとあって流石に寂しさがこみあげてきて、モンゴルの風景を忘れないようにひたすらバスの窓の外の景色に向かってカメラのシャッターを切った。そうして到着してしまった空港はかなり混んでいて、出国審査に時間がかかってしまった。そのため免税店で買い物できることを期待していましたが、あきらめることになってしまったのが残念だ。その後私たちの乗る飛行機は 14 時 30 分ごろに富士山静岡空港に向けて離陸した。帰りの機内では日誌をまとめたり、黄海を進む船舶を眺めたりして過ごした。また４時間のフライトが終わり、17 時過ぎには富士山静岡空港に着陸し、６日間にわたる長いようで短いモンゴルの旅は終わりを迎えた。

３．モンゴルから学んだこと

このモンゴルへの訪問を通して、まずは世界の広さと日本の素晴らしさと特異性を再認識することができたように思う。モンゴルという国は遊牧という日本とは全く違う生活様式を持っていて、そのルーツを同じくするモンゴルの人々は日本人にはないある意味のおおらかさを感じた。また、モンゴルではホテルのシャワーでお湯が出なかったり、水道から茶色い水が出てきたり、道で平然とクラクションを鳴らしたりなど、日本では考えられないようなことを沢山経験した。また、食事で出されたジュースやノミンデパートの食料品売り場で売られていたお菓子、それに高校生の持っていた文房具などの日用品に至るまでほとんどの品物が中国やロシア、韓国や日本など周辺国から輸入したものであったことも記憶に残っている。普段日本で生活していると気づかないものだが、インフラが十分に行き届いており、日常生活のものをほとんど自国で生産できる国というのは意外にも少数なのだということを改めて感じた。そして、モンゴルの現地の高校生と交流する中で、何事も知識だけでなく実際の経験が大切なのだとも分かった。私は知的好奇心が旺盛なので、よく本やインターネットを活用して様々なことを調べる。そのなかで勿論モンゴルのことは少しばかり知っていたものの、実際に経験した 6 日間ではるかにそれよりも多くのことを学ぶことができた。モンゴルに住む彼らが実際にどのような生活をしていて、何を食べていて、どういう考えで、何が好きで、将来はどうしようとしているのか。ここまでの深みにたどり着くのは実際に交流しないと得られないものだろう。そういった意味で、今後はより実際の経験を大切にした生き方や価値観を持っていたいものだと思った。

モンゴルの旅を通して

学校名：浜松学芸高等学校
氏　名：清水　瑠葵

初めに

私が今回のプログラムに参加したきっかけは、私の担任の先生が高校生のころ、この交流事業に参加したときの話を楽しそうに話しているのを見て、それに感化されたからです。話を聞き、興味を持ち、自分でこの交流時について調べていくうちに、楽しさの裏側には異文化交流や体験、見学を通していろいろな学びをできることを知りました。また私は海外への渡航経験がなく、実際に日本の外ではどんな世界が広がっていて、同じアジアでもどういう相違があるのかに興味がありました。そんな私は今回の事業を通じて、コミュニケーション能力や社会問題への関心、グローバルな視点を養うことの重要さを学ぶことができたと感じています。

１日目

私達ははじめ、富士山静岡国際空港から飛行機でモンゴルを目指しました。まだオリエンテーションで 2 回しか顔を合わせていない、初対面もほぼ同然の仲間たちとこれから約 1 週間モンゴルに滞在すると考えたら、「仲良くなれるか」「うまく話せるか」という不安や緊張がありました。ですが、飛行機の待ち時間や飛行機の機内で仲間たちと話していくうちに、少しずつ緊張がほどけ、「このみんなとならどんな問題が起きてもどうにかできそうだ」と感じました。そして、モンゴルに到着してからは現地ガイドのエバさんにお出迎えをしていただき今夜向かうホテルに向かいました。

２日目

あっという間に 1 日目が終わり、2 日目は私達がいた首都ウランバートルからドルノゴビ県に向か

いました。約450㎞ある道のりをバスでおよそ7～8時間かけて行きました。途中、ゲルを立て、遊牧をしていたり、果てのない草原の地平線を自分の目で見たりと、本当に今自分は「日本からモンゴルへやって来たのだ」と感動しました。日本では、いても奈良に鹿が歩いているくらいですが、モンゴルでは違います。道路わきに数十頭の馬や牛、ヤギ、ラクダの群れが普通にいるのです。いろいろな初めてと出会い、感動しているうちに長いバスの旅も終盤に差し掛かりました。そしてついに、サインシャンド群白門でモンゴルの高校生との交流の時が来ました。私のペアは明るく、話すことが好きな人で、良く話しかけてくれました。初対面ではあったけどとても仲良くなることができました。また、顔合わせの後には遊園地で交流し、ペアの高校生とさらに交流を深めました。

３日目

３日目は本格的に交流をしました。第６小中高一貫学校に訪問し、そこで学校交流をしました。そこではモンゴルの伝統舞踊を初めとしたダンスの披露やペアの高校生から、縦モンゴル文字の書き方を習いました。また、私たち日本の高校生訪問団からも、盆踊りをはじめとする日本のダンスや日本にまつわるクイズ、ワークショップを行い、モンゴルの高校生のみんなに日本についてさらに知ってもらいました。またこの日は他にもバレーなどのスポーツも行いました。モンゴルの高校生はみんなバレーが強く、私たちは負けてしまいましたがすごく楽しい思い出となりました。今までは言葉と身振り手振りでコミュニケーションをしてきましたが、スポーツも一種のコミュニケーションをとる方法だと感じました。そして夜に、ジャルガランキャンプへ行き、辺り一面草原の中大音量の音楽でノリノリにダンスや歌を歌い終了です。

４日目

４日目は遊牧民体験として、実際にゲルの中を拝見させていただいたり、乗馬や乗ラクダの体験をしたりました。私は馬には乗ったことがありましたが、ラクダに乗るのは初めてでした。ラクダは馬とはまた違い、馬よりも高く、モンゴルの草原の景色がさらに良く見えました。また、遊牧をしている、ヤギや羊を追いかけて捕まえることもしました。モンゴルでは自然が広く、広大な大地を見ると自然と体を動かし、めいいっぱい疲れたくなりました。モンゴル人がみなスポーツをすることができるのは広い大地があり、小さい頃から沢山体を動かしてきたからだと感じました。またハマリーンヒーデ寺院というパワースポットにも行きました。ここでは全身で大地からのパワーを貰うため、みんなして地面に寝転がり、体中にパワーを貰っていました。そしてこの日はモンゴルの高校生とのお別れもありました。短い間でしたが本当に仲良くなることができ、言葉が通じなくても、上手くコミュニケーションが取れなくても、それ以上に大切なものをペアの高校生から貰った気がしました。友情はどこの国でも変わらないものだと実感しました。

５日目

寝台列車でドルノゴビ県からウランバートルまで移動し、５日目はウランバートル市内の視察を行いました。ウランバートル市内は首都なだけあり、とても近代的で街中というような感じでした。大きな建物やビルが並び大きな道路があり、ドルノゴビとはうってかわり、都会でした。ここではノミンデパートという場所で、買い物をしたり、チンギスハーン博物館に行ったりしました。この日はおもてなしについて考えさせられました。日本とはおもてなしのスタイルが違い、日本は1つ1つ丁寧に関わる人全てに感謝するような感じですが、モンゴルでは気持ちよりも行動で示す感じがしました。モンゴルではお腹を空かせて人を返しては行けないらしく、食べきれなくてもいいから大量のご飯を出されました。同じアジアの国でも場所が違うだけで違いがあり、その違いが今回の旅ではとても楽しかったです。

６日目

約１週間のモンゴルでの活動をすべて終え、飛行機に乗り日本へ帰ってきました。モンゴルへの旅は長いようで短く、最後はもう終わってしまったと思い、とても悲しく、名残惜しくなりました。そして日本に到着し空港で日本の訪問団の仲間たちとのお別れし、本当に研修が終わってしまいました。たくさんの思い出がこの6日目の最後の瞬間に蘇り、またモンゴルへ行きたいと思いました。

まとめ　モンゴルの研修を通して

私は今回の交流をリーダーとして行い、言語の壁があり話したいことが上手く伝わらない中、交流を楽しく、円滑に進めることがいかに難しいかに気付かされました。また、貧困や貧富の差がうたわれる今、現地で過ごしてみて、不自由を感じることは多々ありましたが、不幸を感じることは全くありませんでした。そして、物質的な豊かさと精神的な豊かさは別物だと感じました。「本当の豊かさとは何か」について考えさせられました。また今回は観光という視点を取り入れて研修を行いました。モンゴルの旅では、現地のガイドの方が必須となります。そうなると、必然的にガイドの方や通訳の方と仲良くなることが出来ました。それにより、ガイドの方のおすすめの場所へ案内して貰うことができ、現地の生活を共にしていく中でその土地に行き、見るだけにとどまらず、「見て・触れて・感じて・体験して」その土地の人と深く関わることでモンゴルを知り、また来たいと思えるようになりました。観光の形も変わりつつある世の中、人と深く関わることは観光に置いて大事な役割を果たすと思いました。

モンゴルで見た地平線

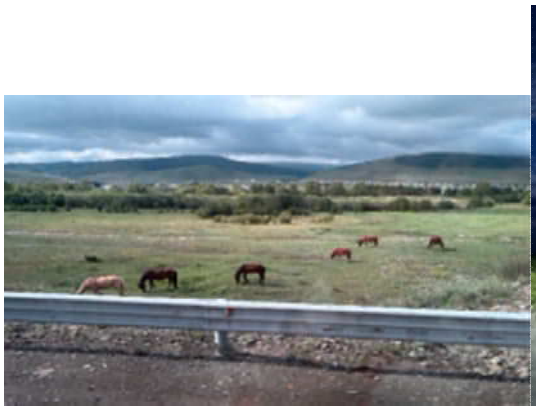
学校名：静岡県立富岳館高等学校
名前：竹平　桃

1・応募の経緯

私がこのプログラムに応募したのは、将来日本語教師になりたいと考えているからだ。私は国外から来た児童に、学習支援をするボランティア活動を行っている。その活動を通して国際関係について深い興味を持ち、他国の文化を学び、日本と比較することで新たな視点が得られるのではないかと考え応募を決めた。海外に行く経験はこれで 2 度目だったが、自身の成長につながるとても良い経験になったと思う。今回は自分の中で特に印象に残ったことについて紹介していこうと思う。

2・モンゴルの気候

モンゴルの気候は、亜寒帯またはステップ気候に属し、年間を通して寒暖差が非常に激しいのが特徴だ。また空気が乾燥していて、日差しは強いものの、湿気の多い日本の夏と比べてかなり過ごしやすいという印象であった。 また、地域によって気温にもかなり差がある。ウランバートルなどの都市部は標高が高く、ドルノゴビ県は低地にある砂漠地帯であるため、冬の寒さが一部で和らぐ一方で夏の日中は高温になる。さらにモンゴルは、昼と夜との気温差も大きい。昼は日差しが強いため、少し暑く感じることもあるのだが、夜になると一気に冷え込む。日本の夏は、昼はもちろん夜も暑いため新鮮な体験だった。



3・遊牧民宅訪問体験

ここでは、ゲルの中を見学させて頂いた。ゲルの中に入る際には、多数のルールがあることを知った。まず、ゲルの中へは右足から入らないといけない。敷居を踏んだり、足で触れたりせずに右足で敷居を跨ぐ。また、ゲルの中は時計回りに移動することになっており、敷居を跨いだ後は、左側へと進む。また、中央の2本の柱の間を通ってはいけない。ゲルの中では、モンゴルのミルクティーと、モンゴルの伝統的なお菓子であるアーロールを振る舞って頂いた。モンゴルのミルクティーは甘くなくて、すっきりとした味わいであった。アーロールは乾燥させたヨーグルトのお菓子で、大切な客人を迎え入れる時に振る舞われる。 その後、乗馬と乗ラクダ体験をした。馬に乗ったことはあったのだけど、ラクダは初めてでとても面白かった。ラクダは乗る時に膝を折ってくれるため乗りやすかったが、降りる際には一気に前足から膝を折るので、前に体が傾き落ちないかヒヤヒヤした。ガイドさんが言うにはラクダに乗るという体験ができるのは世界でも約1%の人だけらしい。とても貴重な体験であった。

4・まとめ

私はこの事業を通して、モンゴルの文化や日本との違いを知るだけでなく、様々なことを体験し、学ぶことができた。日本では絶対に体験できない経験もたくさんさせて頂いたし、 たくさんの人と関わる機会も得ることができた。初めはペアと英語でコミュニケーションを取ることが難しく、うまく意味が通じなかったり、自分の思ったように話せなかったりすることがあったため、もどかしく感じることも多かった。だが、一緒に時間を過ごしていくにつれ、少しずつ英語に慣れて、だんだんと話せるようになったし、言葉だけでなく表情やジェスチャーも交えて会話を進めることの大切さを学んだ。食事や気候、風景、言語、文化などが違うお互いであったが、最終的にはとても仲良くなることができた。お別れの日には、別れるのが寂しくて大号泣してしまった。この研修での6日間は本当に様々なことがあって充実していた。この事業に参加して心から良かったと思う。自身の成長や新たな視点の構築に繋がっただけでなく、次はこの体験を周りの人に伝えることができる。私は今回の体験を活かして、自分の将来に繋げていきたいし、周りの人にもそれらの情報を発信して、これからもモンゴルとの関わりを繋げて行ってほしいと思う。関わって頂いた方々、本当にありがとうございました。

/

モンゴルの旅を終えて

学校名：静岡県立浜松北高等学校
氏名：中木夏美

☆応募の経緯

私がモンゴル国・ドルノゴビ県高校生相互交流事業に応募したきっかけは、学年集会で昨年参加された先輩の体験談を聞いたことです。先輩が語ってくださったモンゴルでの経験に強く惹かれ、「自分も実際に行ってみたい」と思うようになりました。私はこれまで人生の半分以上を海外で過ごしてきましたが、モンゴルを訪れたことはなく、その未知の世界を経験したいという思いからこの事業に応募しました。

☆　8月4日に静岡空港から出発。思ったよりこぢんまりしていて驚いた。モンゴルに到着したのは深夜で、日付が変わって実質2日目になっていた。空港を出た瞬間、乾燥した涼しい空気に包まれ、「ああ、モンゴルに来たんだ」と実感。

空港では現地のガイドさんと合流。驚くほど日本語が流暢で、ノリも良くて安心した。その後、ホテルまではバスで移動。バスの車内はなぜかディスコみたいな照明で、テンションは上がるけれど、正直なところ体力は限界だった。

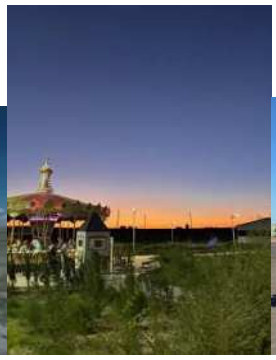
☆　2日目には首都ウランバートルからドルノゴビ県まで約7時間かけて移動。町並みの景色は穏やかな丘へと変わり、やがて広大な草原が広がっていった。人生で初めて見る地平線は、私を小さく感じさせ、自然の壮大さに圧倒された。

サインシャンドに到着すると、モンゴルの高校生たちが伝統衣装（デール）を着て出迎えてくれた。そこで初めてバディーと会った。彼女は明るくフレンドリーで、お互いに簡単に自己紹介をした。

ホテルで休憩した後は遊園地へ向かい、モンゴルの生徒たちのダンスを一緒に楽しんだ。

そのあと約1時間の自由時間では、バディーと一緒にいろいろなアトラクションに乗った。空中ブランコの上から見た夕日が沈む地平線はとても美しく、観覧車ではバディーとゆっくり話せたこと

で、より親しくなることができた。



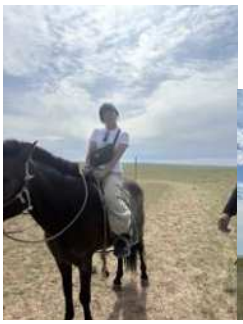
☆　3日目の午前中にはドルノゴビ県の博物館と県庁を訪れた。県庁ではドルノゴビ県の名物であるラクダのレースを見た。ラクダにはそれぞれ静岡県の市町村の名前がつけられ、長いコースを走っていた。その発想がユニークで、真冬の寒さの中20匹のラクダを用意して走らせたと考えると、面白くて仕方がなかった。その後、第6学校で文化交流をした。男女ペアで踊るモンゴルの伝統的なダンスが凄く印象に残った。自分のグループは折り紙をテーマにして、モンゴルの学生と一緒に折り紙を折った。他のグループでも日本文化を楽しんでいる姿を見て、日本文化を伝える立場として嬉しい気持ちになった。

午後、キャンプ場にいった。そこではモンゴル相撲やジャガイを見て、馬乳酒を頂いた。個人的にはお酒っぽい後味が苦手であまり飲めなかったが、チームの中には飲み干している人もいて驚いた。夜ご飯の後にはパーティーがあり、希望者が前に出て歌ったり、みなで手拍子をしたりして盛り上がった。自分のバディーが意外と洋楽に詳しくて自分の好きな曲を知っていて、一緒に歌ってくれるのがすごく嬉しかった。パーティーの最後にはDeath Bedが流れ、バディーと一緒に心から歌った。このように一緒に過ごせる時間も残り僅かだと考えると思わず胸がいっぱいになった。

☆　4日目には遊牧生活をしている家庭を訪問した。ゲルの中に入ったり、ずっと楽しみにしていたラクダと馬に乗ったりした。大きなテントのようなものを想像していたが、想像以上にゲルの中は広々していた。ラクダのコブは意外と柔らかく、ラクダの群れの中にはコブが曲がっているものもいた。ラクダも馬も乗るのが初めてだったので緊張していたが、現地の人とガイドさんがサポートしてくれスムーズに乗り降りすることができた。

その後、ドルノゴビにある有名なパワースポットに行き、床に寝そべってパワーを貰いながら日差

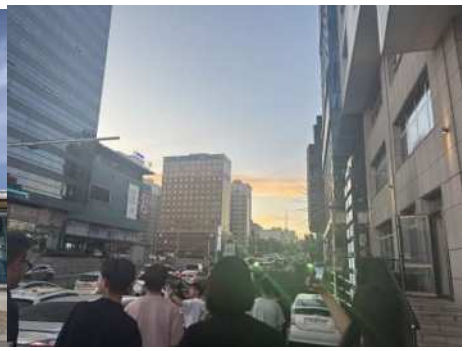
しの下で少し昼寝をした。とても心地よかった。県知事と一緒に豪華な夕食を楽しんだ後、寝台列車に乗ってウランバートルに出発した。バディーとは3日間という短い期間しか一緒にいられかったが、学校のことや家族のことを話したり、彼女の親友を紹介してもらったりして、思っていた以上に仲を深めることができた。



☆　5日目には市内観光をした。ザイサン丘から見下ろすウランバートルはやはり都会だった。マクドナルドやユニクロなどはまだモンゴルに進出していないけれど、サブウェイやKFCなどのファストフードはすでに進出しているらしい。バス停の広告にブラックサンダーがのっていて正直驚いた。お土産を買いにノミンデパートのスーパーに行った。モンゴルの食品以外にも、ロシアや中国のお菓子、日本やドイツのお茶など本当にいろいろな国のものが売られており、日本のスーパーよりもグローバル的だった。ウランバートル市内にある日本の大使館に訪れた。そこで実際に働いている日本の大使の話によるとモンゴルに住んでいる日本人は約200人いるらしい。少なく感じたが、これからモンゴルが発展するにつれて増えるに違いない。チンギスハーン博物館は8階まであり、全部の展示をじっくり見ていると日が暮れてしまう。なので重要なとこをメインに説明された。内容は面白かったが、長時間立ちっぱなしで寝台列車で完全に疲れが取れていなかったこともあり、正直体力に限界が来ていた。夕食ではこの旅で一番食べた。すごく美味しかったがとてつもない量だった。夕食後の解団式では旅の仲間と熱く語り合った。みんなの思い出を聞いてこのメンバーで旅ができて本当に良かったと思った。

☆　最終日。空港に向かうバスの中でのガイドさんのスピーチの言葉で心に刺さったものがある。それは、「やらない後悔よりもやっての後悔」だ。私は新しいことに挑戦するのが好きだが、どうしてもその際周りの目を気にしてしまう。しかしガイドさんの言う通り、行動して思い通りにいかなかった結果に対する後悔よりも行動しないで失うチャンスに対する後悔のほうが大きい。だからこれからも自

分のgood feelingを大事にして何事にも挑戦したい。失敗したとしてもそれは自分を成長させる良い機会となると思うから。



6日間のモンゴル渡航を通して…

モンゴルに行く前はモンゴルに対して遊牧とゲルの印象しかなく、私にとってモンゴルという国は不思議な距離感にある存在でした。だが、実際にモンゴルに行ってみて、モンゴルと日本の文化の違いを肌で経験することができました。特に、現地の高校生と関わり仲を深めることによって、日々、日本で過ごしていると持たない考えや視点に触れることができました。多様性の中で相互の違いに気づけた一方、高校生である以上、友だちと過ごす楽しさと将来への期待と不安と行った点では変わらないということを実感しました。

最後にこの事業に携わってくださったすべての方々に心から感謝の気持ちでいっぱいです。ともに渡航し支え合った県内の高校生メンバー、明るくたくましい現地のガイドさんたち、そして常に私たちを気にかけてくださった先生方――皆さんのおかげで、この6日間の経験はかけがえのないものとなりました。私がモンゴルで過ごした時間は一生の宝もので、今回の交流事業を通してモンゴルのたくさんの魅力に気づけました。このような素晴らしい出会いと学びの機会がこれからも続き、多くの高校生に広がっていってほしいです！

モンゴルでの最高な旅を終えて

学校名：静岡サレジオ高等学校
氏　名：西島 ブリアナ

１．応募理由

先輩がインターネットを通して、現地で生き生きと活動している様子や自分の知らない景色、現地の人々の温かさに触れる姿を見て、「私もあの場所に立ち、同じ景色を見たい」と強く思いました。自分の当たり前が通用しない状況に飛び込み試行錯誤しながらも相手と心を通わせていく経験をしたいです。そして異なる言語や文化の中で、自分に何ができるのかを考え、行動しそれらを通してどんな状況でも一歩を踏み出す勇気、環境に応じて柔軟に対応できる力を習得したいと思いました。

２．モンゴルに足を踏み入れて

私は今回が初めての海外で、とても緊張していました。けれど、飛行機の待ち時間や機内で同じ旅を共にする仲間たちといろんな話をしているうちに、緊張は吹き飛びました。空港を出ると、夏なのにモンゴルの気候は涼しくて、とても印象的でした。バスに乗るとキラキラした内装やガイドさんのノリの良さに「海外に来たな」と実感が湧いてきてワクワクが止まりませんでした。高校生にもなると、年頃のせいか「ワクワクする」という気持ちはあまり感じなくなっていましたが、この日は1年生のときのクリスマスの気分のようでした。

２日目はバスで、ドルノゴビ県へ向かいました。長時間の移動にも関わらず、全ての景色が新鮮で、寝る暇もありませんでした。日本では水平線はありますが地平線はないので、青い空、緑の芝生が一面に広がっていて本当に美しかったです。バスの中でもみんなで歌って踊って写真を撮ってとても楽しい時間を過ごせました。ドルノゴビに着くと、現地の高校生が出迎えてくれました。普段は自分の学校に外国の生徒が来たとき、その子のためにボードを作って迎えることがありますが、今回は生まれて初めて自分がボードをもらいました。実際に受け取ってみて、今までわからなかっ

た相手の気持ちが理解でき、「こんなに嬉しいものなんだ」と実感しました。夜には現地の遊園地に行きました。私は浮遊感が苦手で自分からは遊園地には行かないのですが、今回は気持ちを引き締めて全ての乗り物に挑戦しました。自分1人だったら絶対乗れないような乗り物もペアの子と楽しむためならと思って挑戦しました。乗ってみると案外大丈夫で自分の一生無理だと思っていたことを克服することができた自分に驚かされました。

3日目は第6学校で異文化交流をしました。学校についてバスに降りると、沢山の生徒が出迎えてくれて感動しました。服装もモンゴルの民族衣装でデザインもそれぞれ違くて新鮮でした。その後、現地の子達の舞台発表、中でも、民族舞踊を見たときには本当に感動させられました。そして発表を見ている中でモンゴルの人たちは本当に伝統を大切にしているように感じました。午後にはスポーツ大会をしました。現地の子がサポーターをしていて内心焦りましたが、実際戦ってみると、いい勝負でした。現地のこと混ざって戦った時もみんなでハイタッチをしたり、励ましあったりして、良い友情が生まれたと思います。

夜には現地の子達と歌って踊って心の距離がとても縮まった気がします。ペアの子とも最初はお互い緊張して話せなかったけれど、このときにはなんでも話せる仲になりました。お互い第2言語の英語を使って話しましたが、いつの間にか英語で喋ってるとは思えないくらいスムーズに喋れるようになってました。この日がこのモンゴルの旅で1番楽しかった日です。

４日目はモンゴルを五感で味わった日でした。モンゴルは動物を放牧しているのでバスの移動の際にも沢山の動物が見れてサファリパークの様でした。このときモンゴルは本当に自由な国なのだなと感じました。時間もゆっくりすぎている様に感じて、日本に帰りたくない気持ちになりました。遊牧体験をしたあとは3日間ともに過ごしたモンゴルの子達とお別れをしました。この3日間を通して、みんな本当によくしてくれて、モンゴル人の温かさを知りました。

５日目は市内視察をしました。モンゴルは日本と違い、電動バイクやスクーターは未成年でも乗れるので町中子供達がバイクに乗っていて面白かったです。自分もこの日初めて乗りましたが、アクセルを強く踏みすぎて何度も怪我をしそうなりました。チンギスハーン博物館は 90%が本物ということを聞いてびっくりしました。何千年も前からのものが綺麗に保管されていて、モンゴル人の文化を大切にする姿勢が見えました。夜にはこれまでの旅の感想一人一人述べました。このときいよいよモンゴルと離れるんだなと実感しました。みんなの感想を聞いているとそれぞれの想いや目標が明確にあって刺激を受けました。

最終日、この6日間というのはあっという間な時間でした。世界史の授業でしか知らなかったモンゴルが今ではネットでは乗っていない情報まで詳しく説明できる様になっています。この旅が私の人生でかけがえのない財産になったことを実感しています。ここで生まれた友情をこれからも続けていきたいし、増やしていきたいと思いました。

３．今回の経験を通して

自分は小学校から高校まで同じ学校、敷地にいるのでコミュニティーが狭いです。しかし、今回他の高校生と交流して、沢山の刺激と励ましをもらいました。さらにモンゴル交流を終えて1ヶ月がたちましたが、日常生活が大きく変わったと感じています。自分の視野やが広がり、色々な視点を持てる様になったと実感しています。モンゴルで何事にも挑戦したことで、少しずつですが、授業のプレゼンの緊張感が減り、手を挙げて発言もできる様になり、自分に自信も持てる様になりました。最後に、私はモンゴルに行くと決めて本当に良かったと思います。情報が少ない国だからこそ、もらえる刺激も多いし、楽しみが多かったと思いました。もしも、この事業に行くか悩んでいる人がいたら間違いなく参加を勧めます。この事業に参加したおかげで私の人生や私自身も大きく変わることができました。高校生という難しい時期だからこそ、この体験をぜひ多くの人に実感してほしいです！！

モンゴル国訪問で得たもの

静岡県立藤枝東高校3年　長谷川葵

初めに

私はこの研修を通して、自身が今までいかに狭い価値観の中で生きてきたことを改めて思い知らされました。

高校2年でフィリピンを訪れ、海外の魅力に心を奪われてしまった私は今回の研修にも迷わず応募しました。気候も文化も食生活も日本とは全く違う環境で一体何を感じられるか、採択されてから渡航までの数か月間、本当に楽しみで仕方ありませんでした。

モンゴルでの経験は、そんな私の期待を遥かに上回るほどのものでした。

1日目

モンゴルまでは富士山静岡空港からチャーター機で向かいました。通常よりも機体が小さかったのか乱気流の影響でとても揺れました。正直この時点で(モンゴルは関係ないけれど)ものすごく楽しかったです！テンションが上がってしまい一睡もできずについに到着。空港からバスで１時間ほどかけてホテルに向かいました。ホテルで早速モンゴルらしい(？)ハプニングに見舞われました。「エレベーターが急に真っ暗になって止まる＆部屋のシャワーが出ない」。これぞ海外だ、ついにモンゴルに来たと実感しました。

2日目

この日はほとんどバス移動でしたが、一番肌でモンゴルを感じた日でもありました。ウランバートルを抜けた瞬間、沢山の馬や羊が歩いている雄大な自然が目の前に広がりました。同じ地球とは思えないほど綺麗で涙が出そうになりました。日差しが強いので暑いのかと思いきや、空気が乾燥していたのでとても過ごしやすかったです。そして初のモンゴル料理を体験することに。私が食べたハンバーグのようなものはまさかの羊肉で作られていたようで、初めての味に衝撃が隠せませんでした。あの強烈な味とにおいは今でも忘れられません。強烈な味といえばもうひとつ。アーロールです。一口でリタイアしてしまいました…。２日目は初めてのバディとの対面の機会でもありました。モンゴルの高校生の子たちは英語が流暢な子が多い印象で、私自身含め日本はまだまだだと感じました。しかし

拙い英語だからこそ試行錯誤して相手に伝わった時の嬉しさは、同じ言葉を話す者同士では感じることができないものだと思いました。

２日目は全体的に濃かったのですが、私が一番印象に残った出来事は何といっても「冷水シャワー」です。この日のドルノゴビホテルではなぜか冷水しか出なく、モンゴルらしさを全身で味わうことができました！！

3日目

３日目も表敬訪問に学校交流、バレー対決など盛り沢山でしたが、全部の思い出を書くと書き切れないので「ジャルガランキャンプ」のことを書こうと思います。まずはやっぱり馬乳酒です。羊肉、アーロールと肩を並べるくらいの強烈具合でした。モンゴル相撲やくるぶし投げ、馬頭琴での演奏を生で見せてもらい、もうすっかり気分はモンゴリアン。モンゴルに浸っていたその時、突然爆音で音楽が流れ、なんとクラブが開催されました。やはりモンゴルは最高だと音楽に乗って楽しんでいたのも束の間、一体どういうわけか、私はテムさんに連行されていつの間にかステージ上に。大人数の前で代表と一緒に「ヘビーローテーション」を踊る事態になりました。果たして盛り上がるのかという不安はイントロが始まった途端に消え、会場全員が盛り上げてくれました！

３日目はこれで終わりかと思いきや、モンゴルはこんなもんじゃありません。
なんと、夜は建物の床一面に虫が！！模様かと思う量で、開いた口が塞がりませんでした。
シャワー室に関してはドアも開けられないくらいの異臭を放っていました…。

4日目

この日も沢山モンゴルの文化に直に触れることができました。ゲル訪問にラクダ体験、寝台列車。The モンゴルを体験しました。ゲル訪問では、ゲルには「右足から入る、中は時計回りに進む、真ん中を通らない」などの様々な決まりがあり、男女で役割や座る位置も決まっているそうです。ゲルはただの家ではなく、モンゴルの文化そのものを表しているということを学びました。ラクダ体験は想像以上に高く落ちるかと思いましたが、それ以上に大自然の空気が心地よくて、モンゴルに来てよかったと心の底から感じました。(乗り終わった後、皆の口から「服臭い！！」が飛び交っていたのもいい思い出です)4日目のラスト、寝台列車は本当にここで4人寝るのかと疑うくらい本当に狭くて楽しかったです。車内から見る景色は圧巻でした。

5日目

最終日は主に観光をしました。ザイサントルゴイの丘、日本大使館、チンギスハン博物館、ノミンデパート。ハードスケジュールすぎて最後の方はみんな歩きながら寝ていました。やはり首都であるウランバートルは発展しており、ドルノゴビの景色とはまた違う良さがありました。チンギスハン博物館は基本撮影禁止なのですが、なんとお金を払えば撮影 OK になるそうです。そういう自由さからも、モンゴルらしさをしみじみと感じました。日本大使館ではモンゴル語は日本語と似た部分があると知り、なんだかとても嬉しくなりました。いつか私もモンゴル語を使ってモンゴル1人旅をしてみたいです。夕食で改めて羊肉は私には合わないと再確認し、ホテルで最終日の夜を思う存分楽しみました。2回のオリエンテーションとモンゴルでの1週間という短い期間の中で、これだけ 20 人の絆を深めることができたのは、このモンゴルという自由な地で共に過ごしたからだと思います。解団式では皆の思い出話を聞いて、それぞれが色々な形でモンゴルを存分に楽しんでいたことが伝わってきて胸がいっぱいになりました。

最後に

エレベーターはいきなり止まるし、シャワーは出ないし、出たかと思いきや冷水だし、虫はすごいし、遊園地のスタッフはスマホをいじっているし、スーパーの店員さんはどこか素っ気ないし。モンゴルは本当に自由で最高の国でした。雄大な自然に囲まれ、時間や規則におおらかな風潮がこの自由さを育んでいるのだと思います。衛生環境や食事の豊かさなどの面において日本の魅力を再発見したと同時に、日本はもう少しゆるく生きてもいいのではないかと思いました。実際、モンゴルの人たちは本当に楽しそうに生きていて、私自身もそこで１週間過ごしただけなのに、お風呂に入れなくても、虫が大量に死んでいても、「まあいっか」「なんとかなるか」と思えるようになりました。この経験は私にとって一生忘れられない思い出になったと同時に、私の視野の狭さに気づかせ、国際交流の大切さを改めて感じ、もっといろいろな国を訪れたいという思いを強くしました。たった6日間の経験でしたが、私の世界は確実に広がりました。「やらない後悔よりやる後悔」。このモンゴル訪問をきっかけに、もっと広い世界に飛び込んでいこうと思います。

モンゴル国ドルノゴビ県高校生相互交流での学び

学校名：静岡県立池新田高等学校
氏　名：播磨イチロウ

０．モンゴル国ドルノゴビ県高校生相互交流に応募した経緯

私がモンゴル交流事業に応募しようと思ったきっかけは、中学校の社会科の授業でモンゴルの遊牧民の暮らしや、広大な自然について学んだことでした。広い草原での生活や伝統文化に強く惹かれ、いつか実際にその地を訪れて、自分の目で見てみたいという気持ちが芽生えました。

また、以前に外国からの留学生と交流する機会があり、言葉や文化の違いを越えて心が通じた経験がとても印象に残っています。その経験から、異文化交流の楽しさや大切さを実感し、もっと世界を知りたいと思うようになりました。

今回のモンゴル交流事業は、モンゴルの文化に直接触れ、現地の人々と交流できる貴重な機会だと思い、ぜひ参加したいと考えました。この経験を通じて、視野を広げ、自分自身も成長したいと考えています。将来的には、国際的な分野で活躍できるような人になりたいと思っており、その第一歩として今回の事業に応募いたしました。

１．６日間の渡航の日程

8月4日　1日目

午後は、富士山静岡空港に集合し、2回しか顔合わせしていないみんなとモンゴルに飛び立ちました。チンギス・ハーン国際空港に到着しガイド会社の社長であるエバさんと合流しました。バスに乗り20分ほど東横INNホテルに向かって移動しました。2回しか顔合わせしていないみんなとも移動や待ち時間で打ち解けることができました。

8月5日　2日目

朝は、ホテルで朝食を食べました。東横INNは日本のホテルだったので朝食は日本らしさがありました。ホテルを出る準備を終えたらバスの乗りドルノゴビ県へ移動しました。昼は、バスの移動中に寄ったおしゃれなレストランで昼食を食べました。友達は誕生日だったのでケーキをもらっていました。午後は、ドルノゴビ県に到着し現地の高校生に出迎えしてもらい写真を撮ってからドルノゴビホテルに行きました。夜は、ホテルで夕食を食べ夜の遊園地で現地の高校生と遊んだりモンゴルの踊りを披露したりしてもらいました。

8月6日　3日目

朝は、ホテルで朝食を食べました。荷物を運んだらドルノゴビ歴史博物館を見学しました。いろいろな実寸台の動物などがありクオリティーが高いなと感じました。博物館の見学が終了しそのまま県知事へ挨拶に向かいました。お土産をもらいラクダの競争をみさせてもらいました。昼は、第6小中高一貫学校で交流をしました。それぞれ選んだ本を学校にプレゼントしたりワークショップを通して日本の文化を紹介しました。そのまま第6小中高一貫学校の食堂で昼食を食べました。学校での交流が終了したら競技場へ移動し日本対モンゴルの親善試合をしました。モンゴルは屋内スポーツが有名でとても強かったです。親善試合を終えたあと静岡道路を見学しました。午後は、バスに乗り現地の高校生とジャルガランキャンプへ向かいました。そこでは、伝統的な楽器を使った音楽やモンゴル相撲を鑑賞しました。モンゴル相撲を体験できるとのことで挑戦してみましたがやはりとても強く手も足も出なかったです。夜は、オープンマイクで歌を披露したり踊ったりして楽しみました。話したことない子とも話すきっかけを持てた人もいたり言語の壁をジェスチャーを使いながら越えようとしている人もいてとても良い時間だと感じました。最後は、キラキラ星をみんなで歌い3日目は終了です。

8月7日　4日目

朝は、ジャルガランキャンプで朝食を食べました。荷物をバスに乗せてから遊牧民宅へ訪問しゲルの見学や乗ラクダや乗馬をしました。初めての乗ラクダでしたが、ラクダのゆっくりした歩き方が心地よく、モンゴルの風景をのんびり楽しめました。昼は、ハマリーンヒーデ寺院というパワースポットを見学しパワーを貰いました。午後は、県知事主催の歓迎夕食会にいきました。豪華な料理や歌の披露などがありました。寝台列車で食べるお菓子などをもらったらホテルをあとに戦車丘を見学しました。サインシャンド駅で現地の高校生と最後のひとときをすごしたらドルノゴビ県をあとに寝台列車でウランバートルに向かいました。夜は、電車の遅延によりゆっくり夜景をみることはできませんでしたが電車を降り夜景を楽しみ4日目は終了です。

8月8日　5日目

朝は、東横INNホテルで朝食を食べました。荷物をホテルにおいたらウランバートル観光向かいました。まずは、展望台に向かい景色を楽しみました。ドルノゴビとは違い建物が沢山あり同じモンゴルとは思えないくらいでした。展望台で少しお買い物をしたらホテルで昼食を食べました。ホテルではお相撲さんの照ノ富士さんを見かけることができました。昼食を食べたら日本の大使館に向かいお話を聞きました。大使館の中は日本のつくりで日本に帰って来たのかと錯覚してしまいました。大使館で話を聞いたあとノミンデパートに向かいました。デパートの従業員は日本とは違う働き方をしておりとてもたのしそうでした。ノミンデパートで買い物を終えたらチンギス・ハーン博物館に行きさまざまな歴史を学びました。チンギス・ハーン博物館は98%本物が展示してあるそうでとても他では見ることができないものがたくさんありました。夜は、本格的なモンゴル料理をたくさん食べることができました。ゴンさんからお土産ももらいました。モンゴル人はおもてなしを大切にしていてとても尊敬できるところだと思いました。夕食を食べ終わったらホテルに戻り反省会をしました。モンゴルの旅で不安が沢山ある人や海外が初めての人もいたけど積極的に取り組んでいて自分もその行動力を見習っていきたいと思いました。部屋に戻り荷物の準備をしたら5日目終了です。

8月9日　6日目

朝は、ホテルで朝食を食べました。荷物を持ちロビーに集合したら、バスに乗りチンギス・ハーン国際空港に移動します。ここでは、ガイドをしてくれたムンクさんとエバとお別れです。税関などを終えたら飛行機に乗りモンゴル国を去りました。飛行機ではもう初めの頃の様子はなくみんな仲良しでした。午後は富士山静岡空港に到着し、家族と再会し、モンゴル国ドルノゴビ県高校生相互交流は幕を閉じました。

２．モンゴル国ドルノゴビ県高校生相互交流を通しての学び

モンゴル交流事業に参加して、私はたくさんの大切なことを学びました。出発前は、「広い草原で馬に乗ってみたい」とか現地の人とたくさん交流したいといった楽しみな気持ちが大きかったのですが、実際に現地で生活を体験する中で、モンゴルの人々のあたたかさや自然とともに生きる姿勢に深く感動しました。

特に印象に残っているのは、ジャルガランキャンプです。モンゴルの地形や気候を1番感じたなと思いました。また、言葉が通じなくても、ジェスチャーや笑顔で心が通じ合う経験をしたことで、人とのつながりの大切さも実感しました。

この交流を通じて、「ちがい」をおもしろがる気持ちや、相手を尊重する姿勢が大切だと学びました。これからは、学校の中でも積極的にいろんな人と関わり、自分の世界を広げていきたいと思っています。そして、将来は国際的な分野で、文化と文化をつなぐような仕事ができたらいいなと考えるようになりました。

モンゴルでの経験

学校名：静岡県立御殿場高等学校
氏名：本田　和佐

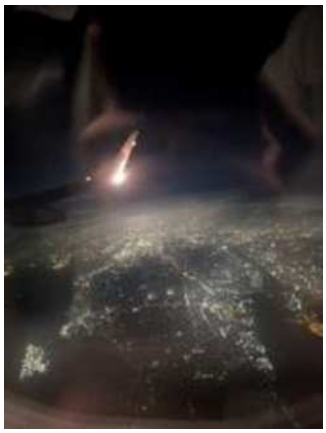
1.応募の経緯

私は本校で工業科に身を置いており、将来工業の仕事に就きたいと思っています。工業分野で働く上で、現代のグローバル社会では諸外国の方とも関わり合います。そのようなことから、本事業で参加し、コミュニケーション能力、英語力を高めたいと思いました。また、外国の方々と関わる上で大切なことは相手のことを知るということだと考えています。外国の方々と日本人である私たちでは文化や価値観が違います。そこで、モンゴルの人々は、どのような価値観を持ち、どのような生き方をしているかということを実際に見てみたいと思い、本事業に応募しました。

2.日程

（1 日目）

1日目は、富士山静岡空港からモンゴルのチンギス・ハーン国際空港に飛行機で向かいました。私にとって初めての飛行機であり、搭乗すること自体にとても緊張していました。しかし、実際には離陸するときのフワッとする感覚が面白いと感じました。夜に離陸していたこともあり、空から見る都市の夜景はとても綺麗でした。4時間のフライトを終えてモンゴルの地に立ってみた最初の印象は涼しいということでした。モンゴルの気候は日本とは違うということを体感しました。空港から1時間でホテルの東横インに泊まりました。外国に日系企業があるということが感慨深いと思いました。



（2日目）

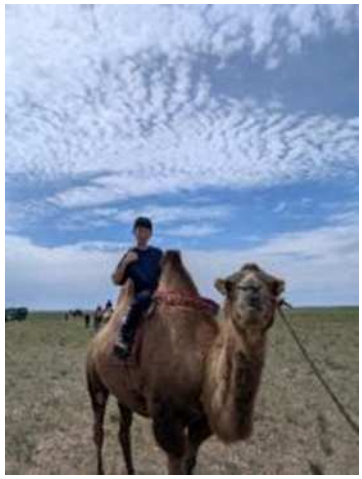
２日目は、首都のウランバートル市からドルノゴビ県までバスで移動しました。バスで450kmという今まで移動したことのない距離だったので、とてつもなく退屈なのではと思っていましたが、車内で音楽を聴いていたり、景色を延々と見ていたりしていたら体感的に意外と早く着きました。ドルノゴビまでの景色は建物がなく、見渡す限り草原でヤギなどの動物もいたので、日本とは全く違う景色は見ていて飽きませんでした。モンゴルに来て最初に驚いたことは料理の量が多いことです。初めての昼食で皿いっぱいに盛られた料理を見て驚きました。モンゴルはお客さんをおなか一杯にして帰すという文化があるそうです。ドルノゴビに着くと、現地の高校生の出迎えがありました。そこで、歓迎のお菓子であるアーロールをもらい、パートナーの高校生と会いました。ホテルで夕食を食べた後、遊園地でペアと交流しました。英語で話すのは不安でしたが、パートナーが親切に話しかけてくれて、とても安心しました。この遊園地でパートナーとの仲を深めることができたと思います。

（3日目）

３日目は午前に歴史博物館に見学して、県庁で知事の表敬訪問をしました。その後、学校で高校生と交流しました。そこでは、日本の文化を伝えることをテーマに、日本の遊びを教え、日本の食べ物を食べてもらい、また、モンゴルの伝統的な踊りを披露してもらい、お返しに日本の踊りを披露しました。昼食後はバレーボールをして交流しました。そのあとは、ジャルガランキャンプに行きました。そこではくるぶし投げという遊びやモンゴル相撲を観たり、馬乳酒を飲みました。馬乳酒は口につけるととてもしょっぱいヨーグルトのような味がしました。アーロールと味が似ていました。夕食後は皆と野外で歌やダンスなどをして交流し、とても盛り上がりました。モンゴルは広いのでどれだけ騒いでも近所迷惑にはならないので、大声を出して日々のストレスを発散することができました。この交流でパートナーだけでなくほかの高校生とも仲を深めることができました。モンゴルの空は日本とは違う美しさを感じました。この経験は私の一生の思い出です。

（4日目）

4日目は、遊牧民宅訪問体験として、実際に遊牧民として暮らしている人のゲルに入りました。出入り口は南側を指し、右足から中に入って時計回りに移動するなど、ゲルについて様々なことを知ることができました。また家畜の馬やラクダに乗りました。ラクダに初めて乗ってみて、高さが馬よりも高いと感じました。そのあとはハマリーンヒーデ寺院というパワースポットを見学しました。そこにはチベット仏教の建物が建てられていて、地面は赤く、実際に靴を脱いで寝転がってみると、石が温かくパワーをもらえた気がしました。夕食は知事主催歓迎夕食会で豪華な料理を食べました。そのあとはパートナーと一緒に戦車丘を見学し、ウランバートルに戻るため、寝台列車に乗りました。寝台列車は狭く不便なこともありましたが、こういう経験も面白いと感じるようになりました。ここで現地の高校生とはお別れだったので、3日間という短い時間でしたがとても名残惜しく感じました。

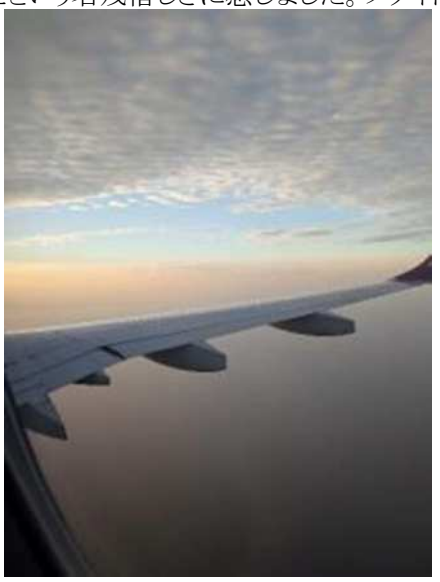


（5日目）

5日目は、ウランバートル市内を視察しました。まず、ザイサン丘に登ってそこの記念碑を見学し、ウランバートル市内を一望しました。そのあとはノミンデパートというデパートでお土産を買いました。初めて日本円以外を使っての買い物だったので、値段を見たときに少し違和感を感じました。昼食後は、日本大使館を訪問した後、スフバートル広場に行きました。そこには政府宮殿や革命の英雄であるスフバートルの像があり、社会主義時代の名残を感じました。そのあとはチンギス・ハーン博物館へ行き、モンゴルの歴史について学びました。一番印象に残ったのは、元寇の時代の展示物でした。当時日本から鹵獲したであろう刀が展示されていたことが印象的でした。夕食はレストランで豪華で食べきれない量の料理を満喫しました。そのあとはホテルで一人ずつこれまでのことを振り返って言葉を述べました。

（6日目）

6 日目は 9 時半に集合だったのが、寝坊して 9 時20分に起きて慌てて準備しました。このハプニングも今ではいい思い出です。ホテルを出発し空港に向かいました。ここでガイドさんとお別れし、飛行機に乗りました。今度乗ったのは夜ではなく昼の便だったので、モンゴルの景色がはっきり見ることができたのと同時に、モンゴルから離れてしまうのだという名残惜しさに感じました。フライト中、モンゴルでのいろいろなこと振り返りました。



3.まとめ

私はこのモンゴルの研修で、モンゴルに行かないとできないであろう様々な経験をすることができました。言語も文化も何もかもが違う場所で、最初は初めての海外ということもあり、緊張と不安でいっぱいでした。しかし 19 人の仲間たちや引率や現地の方々がいてくれたことで、そのようなことは一瞬で吹き飛びました。現地の高校生と交流してみて、お互い言いたい英語がわからなくて気まずい雰囲気になってしまったこともあるけど、それでもジェスチャーや単語の羅列で何とか意思疎通を図ることができました。現地の高校生たちがいてくれたことで、ドルノゴビ県での経験はより良いものとなりました。また、実際にモンゴルで様々な経験を経て、自分の英語でのコミュニケーション能力不足だけでなく、自分はまだ狭い場所にいるのだという視点を持つことができました。
将来私は何をするか具体的には決めてはいませんが、このモンゴルでの経験は必ず役に立つと思います。この経験を活かせることをゆっくりと見つけていきたいです。

My Journey to Mongolia

学校名:静岡県立静岡城北高等学校

氏　名:宮部　恵麻

１．Let’ｓ go to Mongolia!

私がこの事業に応募した理由は学生の間に様々な経験を積みたいと考えたからです。幼少期からアジアの文化が大好きで、将来はアジア諸国と日本を繋ぐ架け橋となるような仕事に就きたいと考えています。現在のアジアは新興国が多く日々どんどん成長をしていますが、そんな中でも伝統が深く残っていることが多く、日本では見られない文化や生活の姿があると私は考えます。モンゴルという国はなかなか普段身近に感じることが少なく、より多くの学びが得られると思い大きな期待を胸に私は飛び立ちました。

２．Сайн байна уу?

1日目　深夜に無事到着し、とても寒いことに驚きモンゴルに来たことを実感しました。周囲に光が全くない空港付近から街に行くにつれだんだんと建物が見え昼間はどんな姿をしているのだろうか、と睡眠不足でしたがわくわくが湧き上がってきました。到着したのは東横インウランバートルホテル。日本語が書かれていて安心していたところ、突如停電し、エレベーターも止まるなどモンゴルをさっそく体感しました。今回の旅は女子男子ともに奇数だったので私は1人部屋が多くこの日も朝起きれるか心配しながら眠りにつきました。

2日目　ドルノゴビへの9時間のバスの旅が始まりました。ウランバートルの街はアジアならではの交通量の多さや建設途中のたくさんの高層ビルなどが見られ、国の発展段階を間近に感じられました。街の中心部から離れるにつれ自然やゲルが目立つようになり、ウランバートルを出ると現れたのは教科書に載っていたどこまでも続く草原。こんなところに住んでいるの？と疑ってしまうぐらい何もない地平線の見える中にポツンとゲルがある世界に圧巻され、いつのまにか私のスマホは草原の写真で溢れていました。

ガイドのテムさんと歌を歌ったり、寝たりしているうちにドルノゴビに着き、民族衣装を着た現地高校生の歓迎を受けました。ペアのテディと初めてここで会い、夕方からは遊園地でともに行動をしま

した。遊園地では、伝統舞踊を教えてもらい私はセンターで少し恥ずかしかったのですが、テディと打ち解けることができました。空中ブランコに乗りながら見た夕日はとても美しかったです。

３日目　前夜はシャワーが冷水であったりネットが繋がらなかったりとトラブルもありましたが、ドルノゴビで過ごす最初の朝は少し涼しく気持ちよかったです。午前中は県庁と博物館に訪れ、ドルノゴビの歴史や静岡との繋がりを学ぶことができました。普段世界史を勉強していますが、他国の歴史を深く学んだことはなかったのでとても興味深かったです。県庁の緊迫した空気の中で急に名指しされてモンゴル人に1番似ていますね、と言われたことも思い出の1つです。午後は第 6 学校へ！前日に引き続きペアのテディにモンゴル書道を教えてもらいました。今まで見てきたキリル文字とはまた違った書体である伝統的なモンゴル文字を初めて知りました。私達も準備してきたワークショップやプレゼンを通して日本文化を伝え、私は折り紙ブースで一緒に鶴を折り喜んでもらえて嬉しかったです。スポーツ交流も行い、モンゴルの子たちと言語の壁を超えて楽しみました。

夜はキャンプへ移動しました。テディと敷地内を探検しながら、拙い英語ですがたくさん話をし、お互い異文化に興味があって将来客室乗務員を目指していることがわかりました。行く先々で顔が似ていて双子みたいだねといわれていましたが、夢も一緒だとわかって私達の仲は更に深まりました。ダンスクラブも開かれ、他のモンゴルの子とも楽しい時間を共有することができ、友情に国境などないということを改めて感じました。夜は少し雲がありましたが、空がとても広く星が綺麗でモンゴルの自然に感動しました。

4日目　この日は遊牧民体験へ！ゲルは間近で見るととても大きく、中も私達 20 人以上が入っても余裕がありました。実際に住む遊牧民の方からお話を聞き、季節ごとに放牧に適した場所に移動することやゲルの中心にある2本の柱の重要性を知りました。外に戻りヤギに触ったり、馬やラクダに乗ったりしました。ラクダは途中ものすごい速さで草原の奥か

ら走ってやってきて驚きました。想像していたよりも乗ると高く貴重な体験でした。

このあとはハマリーンヒード寺院へ行きました。ここはチベット仏教のパワースポットでここだけ赤土が広がっていました。みんなで靴をぬいで横になったり、日本にいる友だちに電話をしたりしてパワーをもらいました。お土産屋さんもあり、同じ訪問団の友達とおそろいのブレスレットを買い初めてトゥグルクを使ったのもここです。とても楽しい時間でしたが、実はこの寺院への移動あたりから私は車酔いで体調を崩してしまいました。

その後は現地高校生と最後のお別れをしました。テディと最後まで手を振り合い、いつかお互いの夢を叶えてどこかの空港で会おうと約束をしました。初めての寝台列車に乗りました。教科書に載っていたシベリア鉄道に自分が乗ることになるとは夢にも思っていませんでした。少し狭いけれど、同室だった引率の先生方ともたくさんお話ができ楽しかったです。

5-6 日目　寝台列車からの朝日はとても美しく、シベリア鉄道ならではだなと思いました。ウランバートルに近づくにつれて草原の景色から街中へと変わっていきました。到着し、ずっと一緒にいてくださったテムさんとのお別れがありました。みんな疲れていたのもありしっかりと感謝を伝えることができなかったのがこの旅の中で大きな後悔でした。

ホテルで少し休んだあとは市内観光です！急遽予定に入ったザイサン丘には大きな輪上のモニュメントがあり、第二次世界大戦時の記録がモザイク画として描かれていました。よく観察していると日本軍の象徴であった旭国旗がモンゴルとソ連の軍人に踏まれている絵があり驚きました。ガイドのMC さんやエバさんによると日本兵やドイツ兵と戦ったときの勝利を表しているそうで、日本とモンゴルにこのような歴史的繋がりがあったことがすごく印象的でした。

次はお待ちかねのノミンデパートです。創立 100 年を超えているとは思えないほど立派で大きな建物でした。6 階のお土産屋さんには、モンゴルの伝統的なものが何でも揃っていて見ているだけでこれまでの旅を思い出しました。1 階にはスーパーがあり、1度店員さんに話しかけたのですが英語がわからないそうで、日本と同じぐらいの英語力の国民が多いのかなと思いました。お会計で

色々なトゥグルク札がでてきて少し焦りましたが、日本の家族や友達へのお土産をたくさん買うことができました。この後はご飯を食べに行ったのですが、私はやはり体調が本調子ではなく、通訳さんと2人現地タクシーに乗ってホテルへ戻りました。交通量の多いモンゴルの街の中にどんどん入っていくのは面白かったです。

夜は解団式を行いました。渡航まで2回しか会ったことしかないメンバーと異国の地へ1週間行くということに少し不安も感じていましたが、この1週間はあっという間でこのメンバーだからこそとても楽しむことができました。解団式でそれぞれどんな思いでこの事業に参加したのかを最後ながら知ることができ、改めて特別で貴重な体験をできたということを実感しました。

３．After visiting Mongolia...

今回のモンゴル渡航は様々な面から私にとってとても大きいものとなりました。特に進路の面では元々、アジアの文化が大好きで将来何かしらアジアと関われたらいいなと考えていましたが、この体験を通して大学でもっと専門的にアジア諸国の文化や社会について学びたいと思いました。また、今まで英語だけ喋れればいいかなと考えて勉強してきましたが、モンゴルでは英語だけでは若い世代でもコミュニケーションを取ることが難しく、もっといろいろな言語に挑戦してみたいと考えるようになりました。

モンゴルという国は普段の生活の中でなかなか意識することはないかもしれません。しかし、実際訪れてみると日本と比べ発展途中ですが、人々はとても暖かく伝統や自然が大切にされ生活の中心となっていて日本や他の国にはない魅力だと感じました。今まで様々な国に行ったり、国際交流をしてきたりしましたが、モンゴルという国はどの国ともまた違った魅力が詰まっている国でした。そして、このように世界中のそれぞれの国に行って自分の目で見ないとわからない違った魅力があると思います。私はこれからの人生で色々な場所にどんどん積極的に行ってみたいと改めて思いました。そして、今回出会ったモンゴルの高校生やテディのように世界中に友達を作りたいです。また、日本に戻り魅力をどんどん周囲に伝え、日本と世界の架け橋となるような人材になりたいです。

最後にこのような素晴らしい機会を与えてくださった静岡県教育委員会の皆様、引率として旅前から最後まで支えてくださった団長の小田切さん、大島さん、河村さん、増田先生、現地ガイドのエバさん、テムさん、MC さん、そして約 1 週間楽しい時間を一緒に過ごしてくれた 19 人の訪問団のみんな、本当にありがとうございました。